

昨日を売る店

ChatGPT 著

第一話 昨日を売る店

商店街のはずれに、その店があった。

看板はない。ガラス戸もない。ただ、古びた木の引き戸に、白い紙が一枚だけ貼られている。

「昨日、買います。」



最初に見つけたとき、真昼は立ち止まって三秒だけ笑った。

冗談みたいな店だと思ったのだ。

昨日を買う。何を言っているのか分からない。人生に疲れた誰かを引っかける、新手的な占いかもかもしれない。

だがその日、真昼はどうしても家に帰りたくなかった。

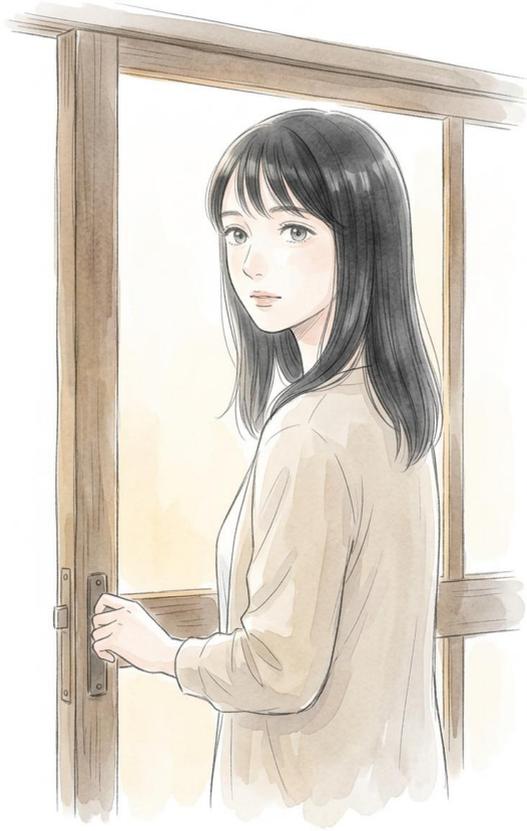
会社で大きなミスをした。正確に言えば、真昼のミスではない。部長が判断を誤り、課長が責任を避け、そのしわ寄せが真昼にきた。会議室で頭を下げたのは真昼だった。

「若いんだから、いい経験になったでしょ」

帰り際に先輩が笑って言った一言が、妙に刺さった。

いい経験。そういう言葉で片付けられるたび、人の痛みには値札がついていないのだと思う。

真昼はため息をつき、引き戸を開けた。



店の中は狭かった。古本屋のようでもあり、質屋のようでもあり、病院の待合室のようでもあった。壁いっぱい小さな引き出しが並び、それぞれに日付が書かれている。

2026年3月5日 2024年11月18日 2013年7月22日

古いものも、新しいものもある。

カウンターの向こうには、年齢の分からない女が座っていた。白いシャツに黒いベスト、髪を後ろでひとつに束ねている。顔立ちは整っていたが、まるで印象が残らない。

「いらっしゃいませ」

「……ここ、何の店ですか」

「昨日を買い取る店です」

あまりにもそのままの答えだった。

真昼は苦笑したが、女は笑わない。

「お客様の昨日を、こちらで引き取ります。なくしたい昨日、持っていたくない昨日、思い出すたびに体が重くなる昨日。そういうものをお預かりします」

「預かる？」

「売る、でもいいです」

「売ったら、どうなるんですか」

女は少しだけ首をかしげた。

「なくなります」

真昼は黙った。

「記憶が？」

「正確には、記憶に付随する重みが消えます。内容もうすくなります。輪郭がぼやけて、自分のことだった気がなくなる。多くの方は、それで十分満足されます」

「そんなこと、できるわけないでしょう」

「そう思う方は、帰られます」

女は淡々と言った。

「でも、お客様はまだ帰っていない」

真昼は言い返せなかった。

店の空気が、妙に静かだった。 時計の音もないのに、時間だけが静かに沈んでいるような感じがする。

「……値段は」

「昨日の種類によります」

「種類？」

「失敗、失恋、屈辱、後悔、選ばなかった道。いろいろございます」

女は帳簿を開いた。

「本日のお客様の昨日は、職場での不当な謝罪、理不尽な責任転嫁、自尊心の摩耗。こちらは中程度の痛みですが、長引くタイプです」

真昼は一步下がった。

「なんで分かるんですか」

「ここに来る方は、たいてい顔に書いてあります」

女は初めて少し笑った。その笑みは優しかったが、優しすぎて逆に怖かった。

「買い取り額は三万円です」

「安いのか高いのか分からないですね」

「妥当です。涙が出るほどではないけれど、夜が少し長くなる昨日ですから」

妙に納得してしまう表現だった。

真昼は財布を握りしめた。三万円ほしいわけではない。ほしいのは、あの会議室で立ち尽くした自分の感覚を消すことだった。

「売ります」

女は小さな銀の皿を差し出した。

「では、昨日を思い出してください。なるべく鮮明に」

真昼は目を閉じた。

冷たい会議室。 長机。 プロジェクターの青白い光。 部長の落ち着いた声。 課長の視線。 自分の声だけが少し震えていたこと。 誰も助けてくれなかったこと。 帰りのエレベーターに映った、自分のつまらない顔。

胸の奥がまた重くなる。

「十分です」

女がそう言った瞬間、真昼の中で何かが、するりと抜けた。

痛みではない。熱でもない。もっと長くそこにいたもの。
見えない棘のようなものが、音もなく引き抜かれた感覚だった。

真昼は目を開けた。

銀の皿の上に、小さなガラス玉が乗っていた。薄い灰色で、会議室の曇った空気みたいな色をしている。



「お客様の昨日です」

「……これが？」

「はい」

女は三万円を封筒に入れて差し出した。

真昼は受け取った。不思議と、さっきまでの怒りが薄い。確かに何か嫌なことがあった気はする。だが、その中心が空洞になったようだった。

「本当に……なくなってる」

「よかったですね」

そう言われて、真昼は安心するはずだった。

なのに、少しだけ寒気がした。

「その玉、どうするんですか」

「保管します」

女は壁の引き出しのひとつを開けた。今日の日付が書かれている。中には同じようなガラス玉がいくつも並んでいた。赤、青、黒、透明、濁った金色。

どれも、誰かの昨日なのだ。

「はい。昨日を欲しがる方もいますから」

意味が分からない。

「そんな人、いるんですか」

「いますよ。自分の人生に厚みが足りないと思う方。他人の痛みをコレクションする方。作家、詐欺師、政治家、恋人」

最後のひとつだけ妙に生々しかった。

真昼は店を出た。

外はもう夕方だった。商店街の電灯がぼつぼつと灯り、魚屋の前を自転車が通り過ぎる。世界は変わっていない。なのに、足取りは少し軽い。

その夜、真昼は久しぶりによく眠れた。

翌朝も気分は悪くなかった。会社に行き、同僚と話し、メールを返し、資料を直した。昨日の件を思い出そうとしても、曇りガラスの向こうを見るようで、細部がつかめない。

部長の顔も、謝った言葉も、なぜあんなに苦しかったのかも。

ただ、昼休みに先輩が言った。

「昨日は災難だったね。よく耐えたよ」

真昼は曖昧に笑った。

耐えた。 自分は何を耐えたのだろう。

その瞬間、ほんの小さな不安が胸に落ちた。

夜、真昼はもう一度あの店へ向かった。

引き戸を開けると、女は昨日と同じ姿勢で座っていた。

「返品はできますか」

女は少しだけ目を細めた。

「できます」

真昼は安堵した。

「よかった」

「ただし」

女は帳簿を閉じた。

「一度売った昨日は、買い戻すと、利子がつきます」

「利子？」

「痛みは、時間が経つほど発酵します」

背筋が冷えた。

「つまり？」

「三万円で売った昨日を買い戻す場合、七万円です。記憶も感情も、少し濃くなって戻ります」

「そんなの……」

「お客様。人は、ときどき勘違いします」

女の声は静かだった。

「苦しみがつらいのではなく、苦しみがあった事実を持ってないことが、つらい場合があるのです」

真昼は言葉を失った。

女は続けた。

「理不尽に傷ついた昨日は、あなたの尊厳の証明でもあります。消せば楽になる。でも、何に傷ついたのかを忘れた人は、同じことをもう一度受け入れてしまう」

店の空気が急に重くなった気がした。

壁の引き出しが、無数の口のように並んで見える。

「あの会議室で、あなたは何を失いそうになったのですか」

真昼は答えられなかった。

でも、分かってしまった。

昨日失ったのは、機嫌ではない。気分でもない。「自分はこう扱われていい人間ではない」という感覚だった。

それを売ってしまったのだ。

だから軽かった。軽くなりすぎていた。

真昼は封筒から三万円を取り出し、カウンターに置いた。

「足りませんよ」と女が言う。

「今日は予約です」

真昼は言った。自分でも驚くほど、声は落ち着いていた。

「すぐには買い戻しません。でも、売らないほうがいい昨日もあるってことは、分かりました」

女はしばらく真昼を見ていたが、やがて小さくうなずいた。

「賢明です」

「でも、どうしてこんな店を？」

女は少し考えてから答えた。

「私は昔、明日を売ろうとした人をたくさん見ました。だから、昨日のうちに止める店を始めたんです」

意味は分からなかった。けれど真昼は、それ以上聞かなかった。

店を出ると、春先の冷たい風が吹いていた。痛みはまだ戻らない。完全には思い出せない。けれど、きっと少しずつ取り戻すべきものなのだと分かった。

商店街の角を曲がると、向かいの空き店舗に、新しい紙が貼られているのが見えた。

「明日、預かります。」



真昼は立ち尽くした。

その店の引き戸の隙間から、見覚えのある白いシャツが揺れた気がした。

第二話 明日を預かる店

真昼は、その紙を見上げたまま動けなかった。

「明日、預かります。」

昨日を売る店の向かいに、明日を預かる店。冗談にしては出来すぎていたし、冗談で済ませるには、さっきの店の女の目が静かすぎた。

向かいの店も、よく似ていた。古い木の引き戸。看板なし。余計な飾りもなし。違うのは、扉の色が少しだけ明るいことだった。昨日の店が古い影のような色なら、こちらは日に焼けた机のような色をしている。

真昼は、吸い寄せられるように戸に手をかけた。

中に入ると、空気が違った。

昨日の店が「沈んだ時間」なら、こちらは「止められた呼吸」みたいだった。静かだが、何かが始まりかけて、そのまま保留されている空気。

店の奥には、男がいた。

白いシャツに灰色のカーディガン。年齢は四十代にも五十代にも見える。椅子に浅く座り、まだ湯気の立つカップを片手に本を読んでいた。真昼が入ると、男はしおりを挟み、顔を上げた。

「ああ。珍しい」

声はやわらかかった。だが、やわらかいのに油断できない声でもあった。

「昨日の店から、そのまま来る人は少ないんです」

「……やっぱり、つながってるんですね」

「向かいですから」

男は当然のことに言った。

「ここは？」

「明日を預かる店です」

「預かるって、どういう意味ですか」

男は立ち上がり、店内を案内するようにゆっくり歩き出した。

壁には棚が並んでいた。昨日の店のような小さな引き出しではない。こちらは透明な瓶がずらりと並び、そのひとつひとつに紙のラベルがついている。

結婚したら 会社を辞めたら 本を書いたら 謝れたら 留学で
きたら 痩せたら 親が死んだら 落ち着いたら



真昼は息をのんだ。

「それ、全部……」

「人が先送りにした明日です」

男は言った。

「いつかやる。落ち着いたら始める。準備ができたと言う。自信がいたら会う。そうやって棚上げされた未来を、こちらでお預かりしています」

真昼は、ぞっとした。

なぜか分からない。昨日を売る店より、こちらのほうが怖かった。

昨日は、もう終わった時間だ。だが明日は、まだ来ていない。来ていないはずなのに、こうして瓶に詰められて並んでいる。

「預けると、どうなるんですか」

「少し楽になります」

男はあっさり答えた。

「人は未来にも圧迫されますからね。やらなければならないこと、決めなければならないこと、踏み出さなければならないこと。それが重すぎるとき、一時的に預けるのです」

「一時的に？」

「ええ。一生引き取りに来ない方もいますが」

男は棚のひとつを軽く叩いた。 中の瓶に、薄い光が揺れた。

「未来は、過去より扱いが難しい。過去は起きた出来事ですが、未来は可能性です。可能性は、人を育ててもしますが、腐らせもする」

真昼は棚を見ていた。

どの瓶も、言葉としてはありふれている。 けれど、その中には誰かの人生の分岐点が丸ごと入っている気がした。

「あなたも、何か預けますか」

男が訊いた。

「私は……」

そこまで言って、真昼は黙った。

胸の奥で、いくつかの言葉が浮かんでは沈んだ。

辞めたい。 でも辞めたあとの責任が怖い。 本当は怒っている。 でも怒ったことで損するのが嫌だ。 このまま働いていていいのかわからない。 いつか、自分の人生をちゃんと選ばないといけない。

その「いつか」が、喉の奥に引っかかっていた。

男は真昼の沈黙を急かさなかった。ただ、カウンターの上に一枚の紙を置いた。

見出しにはこう書かれている。

お預かり可能な明日について

その下に、小さな文字が並んでいた。

- 決断前の不安
- 行動前の緊張
- 伝える前の言葉
- 始める前の理想
- 捨てる前の未練
- 変わる前の恐れ

真昼は紙を見つめた。

「……これ、預けたら消えるんですか」

「消えません」

男は首を振った。

「消すのではなく、延期するだけです」

「じゃあ意味ないじゃないですか」

「ありますよ」

男は少し笑った。

「人は、ずっと全荷重では歩けません」

その言い方は、妙に正しかった。

「今日だけ背負えない明日もある。そういうとき、いったん棚に置く。置いているあいだに眠る、食べる、考える、誰かに会う。そうして筋肉がついたら、また取りに来ればいい」

「……優しい店なんですね」

すると男は、少しだけ困ったような顔をした。

「そうでもありません」

「え？」

「預け癖がつくと、人は自分の明日を他人事のように話し始めます」

その言葉に、真昼は顔を上げた。

男は棚を見たまま続けた。

「本当はやりたいんです。でも今じゃない。いつかやります。タイミングが来たら。条件がそろったら。周りが落ち着いたら。そう言い続けているうちに、明日が“自分の仕事”ではなく、“運がよければ起きる出来事”になる」

店の空気がひんやりした。

「それは……」

「預けすぎた人の症状です」

真昼は、自分の胸のどこかが刺された気がした。

自分も最近、そうだった。「そのうち」「落ち着いたら」「今は忙しいから」と何度も言ってきた。それが本当に戦略的な先送りだったのか、それとも、怖さに別の名前をつけていただけなのか。

見分けがつかない。

「昨日の店の人に、言われました」

真昼は口を開いた。

「理不尽に傷ついた記憶は、尊厳の証明でもあるって」

男はうなずいた。

「正しいですね」

「じゃあ、未来に押しつぶされそうな不安は、何の証明なんですか」

男はすぐには答えなかった。代わりに棚のいちばん端にある、何もラベルの貼られていない瓶を一本取り上げた。中は空に見える。

「これは、十年前に預けられた明日です」

「誰の？」

「忘れました」

男はあっさりと言った。

「預けた本人も、何を預けたか忘れているでしょう。ですが、こういう瓶には共通点があります」

「なんですか」

「中身は、だいたい“本気”です」

真昼は黙った。

男は瓶を光にかざした。



「どうでもいい未来は、人を苦しめません。苦しいのは、大事だからです。失敗したくない。手に入らなかったらつらい。選んでしまったら戻れない。そういう重さは、たいていその人の本気の周辺に発生します」

その言葉は、優しさではなく、診断に近かった。

「だから、不安は意思の証明でもあります。もちろん全部がそうではない。単なる思い込みや社会的圧力も混ざる。でも、逃げたいほど重い明日は、ときどき“本当は向かいたい方向”の影です」

真昼は喉が乾くのを感じた。

「……じゃあ、預けないほうがいい？」

「私は商売人ですから、預けていただいても困りません」

男は穏やかに言った。

「ただ、ひとつだけ基準があります」

「基準？」

「それを預けたあと、あなたが少し休めるのか。それとも、少し腐るのか」

真昼は、その言葉を反芻した。

休めるのか。 腐るのか。

単純なのに、恐ろしく本質的だった。

会社を辞めるかどうか。 怒るかどうか。 別の道を選ぶかどうか。 研究を続けるか。 何を捨てて、何に賭けるか。

それら全部を今すぐ決める必要はない。 だが、先送りすることで自分が休めるのか、それとも鈍っていくのかは、確かに違う。

真昼は棚を見回した。

無数の瓶の中に、誰かの「そのうち」が眠っている。 それは仮置きのように、墓にも見えた。

「預けません」

気づくと、そう言っていた。

男は驚かなかった。

「そうですか」

「でも、ちょっと分からなくなりました。昨日は売らないほうがいいものがある。明日も預けないほうがいいものがある。じゃあ、人は何を手放して、何を持っていけばいいんですか」

男は少しだけ考えた。

「答えを出しましょうか」

「出せるんですか」

「一応、店ですから」

そう言って、男はカウンターの引き出しから、小さな紙片を取り出した。レシートのような細長い紙だった。

そこには、たった一行だけ書かれていた。

持つべきものは、痛みではなく、輪郭。

真昼は読み返した。

「輪郭……」

「昨日を全部抱え続ける必要はありません。未来を全部今背負う必要もない。でも、自分が何に傷つき、何を望み、どこまでは譲れてどこからは譲れないか、その輪郭まで手放すと、人は自分の人生を他人に編集されます」

男は紙を指で叩いた。

「記憶や不安そのものではなく、輪郭を持ち帰ってください」

その瞬間、真昼の頭に昨日の会議室の空気が一瞬だけ戻った。
鮮明ではない。でも、あの場で自分が「これは違う」と感じた
芯だけが、うっすらと戻ってきた。

全部は要らない。けれど、あの違和感の形は必要だ。

真昼は紙を折ってポケットに入れた。

「この紙、持って行っていいですか」

「それは売り物ではないので」

「無料？」

「ええ。たまに本物の客にだけ配ります」

少し嫌味なのか、本気なのか分からない口調だった。

真昼は、ふっと笑ってしまった。

そのとき、店の奥で、コトン、と小さな音がした。

見ると、いちばん上の棚の瓶がひとつ、わずかに揺れている。ラ
ベルには何も書かれていない。だが内側で、ごく薄い光が明滅し
ていた。

「今の、何ですか」

男の表情が少し変わった。

「珍しいですね」

「だから何なんですか」

男は棚に近づき、その瓶を見上げた。

「誰かが、引き取りに来たがっている明日です」

「本人が？」

「あるいは、明日のほう待ちきれなくなったのかもしれませんが」

意味が分からない。　だが、昨日の店を見たあとでは、意味が分からないことがただの比喩だとも思えなかった。

男は振り返り、真昼を見た。

「あなた、最近、夢を見ませんでしたか」

真昼はどきりとした。

昨夜、奇妙な夢を見た。　長い廊下の先に、扉がいくつも並んでいて、そのひとつひとつに見覚えのある文字が書かれていた。

やめる　言う　行く　始める　断る　どの扉も少しだけ開いてい

て、中から光が漏れていた。 だが、真昼はどれにも触れられな
いまま目を覚ました。



「……見ました」

男は静かにうなずいた。

「では、もう近い」

「何がですか」

男は答えず、棚の瓶をそっと元に戻した。

「昨日を売る店と、明日を預かる店のあいだには、もうひとつ店があります」

真昼の背中に冷たいものが走った。

「まだあるんですか」

「あります。けれど、誰でも入れるわけではない」

「何の店なんですか」

男は少し笑った。その笑いは、昨日の店の女の笑いとも違っていた。もっと、人間っぽいのに、どこか諦めが混じっている。

「今を選ぶ店です」

店の外で、風が鳴った。

真昼は振り返った。引き戸の隙間から、夜の商店街の灯りが細く差し込んでいる。向かいには昨日を売る店。ここは明日を預かる店。そして、そのあいだのどこかに、今を選ぶ店。

「その店はどこにあるんですか」

男は本を開き直しながら言った。

「見える人には、最初から見えています」

「見えませんが」

「そうですね。たいていの人は、昨日か明日を見すぎて、今日の入り口を見落とすので」

真昼は言い返せなかった。

そのまま店を出ると、商店街の風景はさっきと同じはずなのに、どこか配置がずれたように感じられた。街灯の位置。シャッターの影。閉店した八百屋の横の細い路地。昨日は無かったはずの、細い石畳の道。

いや、本当に無かったのだろうか。

真昼は立ち止まった。ポケットの中で、紙片が指先に触れる。

持つべきものは、痛みではなく、輪郭。

そして、商店街の音の向こうから、かすかに鈴の音がした。

振り向くと、八百屋とクリーニング屋のあいだの暗がりには、見たことのない暖簾がかかっていた。

白い布に、たった二文字。

「本日」

真昼は、ゆっくり息をのんだ。

第三話 今を選ぶ店

真昼は、白い暖簾を見つめた。

本日。

それだけだった。昨日でもなく、明日でもない。日付すらない。ただ「本日」とだけ書かれた暖簾が、八百屋とクリーニング屋のあいだの狭い暗がりに、ひっそりとかかっている。

こんな路地、さっきまであったらどうか。

石畳は細く、奥はよく見えない。街灯の光が届かないのに、不思議と真っ暗ではなかった。どこか、夕方の縁側のような薄い明るさが漂っている。



真昼は一步、路地に入った。

後ろで商店街の音が遠のく。 自転車のブレーキ音も、惣菜屋のシャッターの音も、子どもの笑い声も、布を一枚隔てた向こう側に押しやられていく。

暖簾の前まで来ると、風もないのに布がわずかに揺れた。

中は見えない。

真昼は一度だけ息を整え、手で暖簾を分けた。

店の中は、思っていたより普通だった。

狭い。 だが、昨日の店ほど息が詰まらず、明日の店ほど空気が張りつめてもいない。 古い木の床。小さな丸テーブルが三つ。壁には時計が一つだけかかっているが、針は動いていない。窓はない。奥には小さな台所のようなものがあり、湯気が静かに上がっていた。

喫茶店のようでもあり、診療所の待合室のようでもあり、誰かの家の食卓のようでもあった。

そして、店の真ん中に、人がいた。

若いのか年老いているのか分からない。 男にも女にも見えるし、どちらでもないようにも見える。髪は短く、紺色の割烹着のよう

な服を着ている。顔立ちは整っているのに、視線をそらすとすぐ忘れそうだった。

その人はテーブルを拭いていたが、真昼に気づくと、布をたたんで椅子を引いた。

「いらっしゃい」

声は、驚くほど普通だった。 昨日の店の女ほど冷たくなく、明日の店の男ほど含みもない。 ただ、普通すぎて、逆に逃げ場がない声だった。

「ここは……」

「今を選ぶ店」

その人は言った。

「聞いたよ。向かいから」

真昼は立ったままだった。

「何をする店なんですか」

「選ぶ店だよ」

「何を」

「今日を」

あまりに簡単に言われて、真昼は少し腹が立った。

「そんなの、毎日勝手に今日になりますよね」

「なるね。でも、過ごしていることと、選んでいることは違う」

その人は湯呑みをひとつ置いた。湯気の立つ、ただの白湯だった。

「座って」

真昼は警戒しながらも、椅子に腰を下ろした。

木の椅子は少し冷たかった。白湯を持つと、指先だけが温かくなる。

「昨日を売る人は、昨日に引っぱられている人。明日を預ける人は、明日に押されている人」

その人は向かいに座った。

「でも今を選ぶ店に来る人は、少し違う。昨日も明日も見えてしまつて、今日だけが薄くなる人だ」

真昼は黙った。

凶星だった。

昨日の店で、失った輪郭のことを知った。 明日の店で、不安が本気の影かもしれないと知った。 そうすると逆に、今日どうすればいいかが一番分からなくなる。

「ここで、何を選ばされるんですか」

「別に強制はしないよ」

その人は肩をすくめた。

「ただ、君にはたぶん、三つくらい“今日できること”がある。そのうちひとつを選ぶだけ」

「そんな簡単な話ですか」

「難しくするのが昨日と明日の仕事だからね」

少しだけ、真昼はむっとした。

「私の状況、知らないくせに」

「知ってるよ」

「なんで」

「ここに来る人は、たいてい同じ顔をしてる」

昨日の店の女と似たことを言う。 けれど意味は違った。

この人の言う「同じ顔」は、傷ついた顔でも怯えた顔でもない。
決めきれずに、自分の時間を自分に渡していない人の顔だ。

その人は、テーブルの上に三枚の小さな札を置いた。 厚紙に墨
でひとことずつ書かれている。

言う やめる 待つ

真昼は眉をひそめた。

「これだけ？」

「だいたい今日の選択は、その三つに入る」

「雑すぎませんか」

「雑じゃない。具体的な行動はいろいろあるけど、核はだいたい
この三つだよ」

その人は一本指を立てた。

「言う。 伝える。 断る。 頼む。 謝る。 怒る。 告げる。 言葉で現
実に切れ目を入れる選択」

二本目。

「やめる。 終わる。閉じる。捨てる。離れる。手放す。自分を消耗させる流れから足を抜く選択」

三本目。

「待つ。 今すぐ動かない。未熟なまま飛び込まない。観察する。保留する。見極める。これは逃げとは違う。熟すまで待つ選択」

真昼は札を見つめた。

たしかに、乱暴なくらい単純なのに、なぜか自分の状況を切っている気がした。

「全部必要に見えるんですけど」

「そうだろうね」

「じゃあどう選べばいいんですか」

その人は少し身を乗り出した。

「昨日を取り戻したいから言うのか。 明日が怖いからやめるのか。 決断したくないから待つのか。 まずそこを見ればいい」

真昼は息を止めた。

札の文字が、急にこちらを見返してくるように感じた。

言う。 会社で起きたことに対して、自分は納得していないと伝えることかもしれない。 やめる。 その場に居続けることで、輪郭が削られていくなら、離れることかもしれない。 待つ。 衝動で壊さないために、材料がそろうまで動かないことかもしれない。

どれも本物だった。 だから余計に難しい。

「正解はあるんですか」

「あるときも、ないときもある」

「ずるいですね」

「今日の店は、昨日や明日の店ほど親切じゃないんだ」

その人は笑った。

「ここでは“何が正しいか”より、“その選択を自分で引き受けるか”のほうが大事だから」

真昼は白湯を飲んだ。 ぬるくも熱くもない、ちょうどいい温度だった。 それが妙に腹立たしかった。完璧に整えられた温度であることが、この店の性格みたいだった。

「……もし間違えたら」

その人はすぐに答えた。

「間違えるよ」

真昼は顔を上げた。

「かなりの確率で」

「そんなこと言われると選べない」

「でも選ばないと、もっと別の形で間違える」

静かだった。その静けさが、逃げ道をひとつずつ塞いでいく。

その人は続けた。

「人はよく、“正しい一手が見えるまで動けない”と思っている。でも実際には、動かなかった結果のほうが、後から見ると大きいことが多い。輪郭が削れる。習慣が固まる。他人が決める。疲れて考えられなくなる。そういうふうには、選ばなかったことも選択になる」

真昼は札に視線を落とした。

選ばないことも、選択。

それは耳慣れた言葉のはずなのに、この店で聞くと急に重かった。

「ひとつ、教えてあげようか」

その人は札を指で軽く回した。

「“言う”を選ぶ人は、自分を守るために言うべきで、相手を変えるために言うべきじゃない」

「……どういうことですか」

「相手が理解して反省して良い人になってくれることを期待して言うと、だいたい失敗する」

その人は平坦に言った。

「でも、自分の輪郭を守るために、ここから先は違いと線を引く。そのために言うなら、相手の反応がどうでも意味がある」

真昼の胸が、少しだけざわついた。

会社で何かを伝えるとしても、相手を改心させるためではなく、自分の輪郭を確認するために言う。それなら、たしかに少し意味が違う。

「“やめる”は？」

「やめるのは、負けじゃない」

即答だった。

「でも、やめる理由が“もう感じたくない”だけだと、別の場所と同じことが起きる。“ここでは自分の輪郭を守れない”と分かってやめるなら、たぶん前進になる」

「“待つ”は？」

「待つは、一番誤魔化しやすい」

その人は初めて、少しだけ厳しい顔をした。

「本当に待つべき人は、待っているあいだに観察や準備をしている。ただ時間を溶かしているだけなら、それは待つじゃなくて先延ばし」

真昼は、目をそらした。

痛いほど分かる。

時間をかけているつもりで、ただ疲れていただけのことが何度もあった。考えているつもりで、決める恐怖を薄めるために同じ場所を回っていただけのことも。

そのとき、店の奥の止まった時計が、コツ、と一度だけ鳴った。

針は動いていないのに、音だけした。

真昼は反射的に時計を見た。戻ったときには、テーブルの上の札が一枚増えていた。

払う

「……増えてる」

その人は小さく笑った。

「たまにある」

「何なんですか、これ」

「今日の選択肢の四つ目。払う」

「お金？」

「お金とは限らない。手間、面倒、恥、沈黙の終わり、関係の摩擦、短期的な損。そういうコストを払うってこと」

真昼は息をのんだ。

それは、今までの三つを全部現実にするための言葉だった。

言うにも、払うものがある。 やめるにも、払うものがある。
待つにしても、適当に待たず準備するには、払うものがある。

「人はね」

その人は指先で札を整えた。

「選択そのものを怖がっているんじゃなくて、選択に付随する支
払いを怖がっていることが多い」

真昼は何も言えなかった。

たしかにそうだった。

会社に何かを言えば、空気が悪くなるかもしれない。 やめれば、
収入や立場が揺らぐかもしれない。 待つなら、そのあいだ不安
と向き合い続けなければならない。

怖いのは決断ではなく、代償なのだ。

「じゃあ、私は何を選べば……」

言いかけて、真昼は口を閉じた。

この店は、そこを代わりに言わない。 それだけはもう分かっ
ていた。

その人は、助け舟を出すように尋ねた。

「君がいま一番避けたい支払いは何？」

真昼はしばらく答えられなかった。

空気が悪くなること。嫌われること。面倒な人だと思われること。その先の評価。孤立。失敗。後悔。

いろいろ浮かんだが、もっと芯のところに別のものがあった。

「……失望です」

「誰に？」

「自分に」

声が小さくなった。

「また何も言えなかった、とか。また、何となく耐えて、自分で自分を安く扱ったとか。そういうのが、一番いやです」

その人は静かにうなずいた。

「じゃあ少なくとも、“何もしない”は外れるね」

真昼は札を見つめた。

言う やめる 待つ 払う

その並びが、少しずつ意味を持って並び変わっていくように見えた。



やめる、はまだ早いかもしれない。 待つ、は今の自分には逃げて化けやすい。 払う、は方法ではなく覚悟だ。 残るのは——
真昼は一枚の札に指を置いた。

言う

置いた瞬間、札の表面がわずかに温くなった。

その人はそれを見て、驚きもしない。

「そう」

「でも、大きいことは言えません」

「大きくななくていい」

「辞めますとか、戦いますとか、そういうのじゃなくて」

「うん」

「せめて、あの件について自分は納得していないこと。今後同じことがあるなら困ること。そこだけ、言いたい」

その人は満足そうでもなく、がっかりした様子もなく、ただ事実として受け取った。

「十分だよ」

「十分なんですか」

「今日の店では、英雄は扱ってない」

真昼は思わず笑ってしまった。

その人も少しだけ笑う。

「今日選ぶのは、人生を全部変える一手じゃない。輪郭を削らない一手だ」

その言葉は、昨日の店と明日の店の話を一本に束ねるようだった。

真昼は札を握った。紙なのに、消えずに手の中に残っている。

「これ、持っていけるんですか」

「持っていける」

「お金は？」

「いらぬ」

「無料の店なんですね」

すると、その人は初めて、ほんの少し鋭い目をした。

「無料じゃないよ」

「え？」

「さっき自分で見ただろう。払うものはある」

その通りだった。

この札の代金は、明日払うのではない。 店を出たあと、現実で払うのだ。 緊張も、気まずさも、もしかしたら小さな不利益も。

「最後にひとつだけ」

その人は立ち上がった。

「君はこれから、“うまく言う”ことを考えすぎる」

真昼はぎくりとした。

「でも本当に必要なのは、完璧な言い方じゃない。 短くてもいいから、自分の輪郭に沿った言葉で言うこと」

その人は真昼の前に、小さな鉛筆を置いた。

「ここに書いて」

見ると、白紙の細長い紙がある。

真昼は少し迷ってから、鉛筆を持った。 書いたのは、たった二行だった。

あの件は、私は納得していません。 今後同じ形になるなら、事前に相談してほしいです。

書き終わると、妙に呼吸が深くなった。

その人は紙を見て、うなずいた。

「いいね。相手を裁くより、自分の線を示してる」

「これで大丈夫ですか」

「大丈夫じゃないかもしれない」

「……」

「でも、それでいい」

あまりにもこの店らしい答えだった。

真昼は紙を折り、札と一緒にポケットへ入れた。

席を立つ。

「また来てもいいんですか」

その人は少し考えた。

「来てもいい。でも、できれば来ないほうがいい」

「なんで」

「今日を選ぶ店は、通い詰める場所じゃない。使いすぎると、人は選ぶことに酔う」

「選ぶことに酔う？」

「決断した気になって満足するんだ。 本当は外で引き受けなきゃいけないのに」

真昼は苦笑した。

この商店街の店たちは、どこも最後に少しだけ厳しい。

暖簾をくぐる前に、真昼は振り返った。

「あなたたち、何者なんですか」

その人はテーブルを拭き始めながら答えた。

「人が見たくない時間を、少しだけ見やすくしてるだけ」

「それだけ？」

「それ以上ではないし、それ以下でもない」

外へ出ると、商店街の夜気が戻ってきた。 風があり、遠くで誰かが笑っていて、閉店間際の店の蛍光灯が白かった。

振り返ると、暖簾はもう見えなかった。

そこには、ただの古い壁と、自販機の横の狭い隙間があるだけだった。

夢だったのだろうかと思う。　だが、ポケットの中には札と紙がある。

真昼はそれを指先で確かめ、商店街を歩き出した。

足取りは軽くない。　むしろ少し重い。　明日、自分で言わなければならぬからだ。

でもその重さは、昨日を売ったときの空っぽな軽さとは違う。輪郭のある重さだった。

交差点の信号待ちで、スマホが震えた。　会社のグループチャットだ。　課長から、明日の朝の打ち合わせについて短い連絡が来ている。

真昼は画面を見た。

少し迷う。　今送るか。　明日直接言うか。　一瞬だけ、見なかったことにして歩き出したくなる。

だが、ポケットの中の札が指に当たった。

言う

真昼は立ったまま、スマホに短く打ち込んだ。

明日の件、少しお時間ください。先日の対応について、私の認識もお伝えしたいです。

送信。

たったそれだけなのに、心臓が強く鳴った。

すぐには既読が見つからない。

夜の交差点で、赤信号が長く感じる。逃げたくなる。削除できないかと一瞬思う。

やがて、画面に「既読」がついた。

真昼は息を止めた。

返事はすぐには来ない。

けれど、その代わりに、信号が青に変わった。



真昼は歩き出した。 街の向こうに、朝が来る。 その朝はたぶん、気まずい。 たぶん少し怖い。 でもそれは、自分で選んだ今日の続きだった。

そして商店街のはずれ、昨日を売る店があった場所を何気なく見ると、木の引き戸の前に白い紙が一枚、新しく貼られていた。

「返品のご相談は、午前中に。」

真昼は思わず笑った。

その笑いが消える前に、スマホがもう一度震える。

課長からだった。

了解です。朝、少し時間を取りましょう。

短い文面。謝罪もない。優しさもない。だが、それでよかった。

真昼はスマホをしまい、夜道をまっすぐ歩いた。

もう、今日を他人に編集させないために。

第四話 返品の朝

朝は、思ったより普通に来た。

目覚ましが鳴り、真昼は一度だけ天井を見た。何か劇的な気分の変化があるわけではない。勇気が満ちることもないし、覚悟が完成している感じもしない。

むしろ、少し胃が重かった。

昨夜送ったメッセージは消えていない。課長からの「朝、少し時間を取りましょう」も、そのまま画面に残っている。

真昼は布団の中でスマホを見つめ、それからゆっくり起き上がった。

洗面所の鏡に映る自分は、いつも通りだった。寝癖が少しついていて、目の下に薄い影がある。革命を起こす人間の顔ではない。ただ、会社に行きたくないと思っている人の顔だ。



それでいい、と真昼は思った。

昨日、今を選ぶ店で言われた。英雄は扱っていない。必要なのは人生を全部変える一手ではなく、輪郭を削らない一手だと。

朝食を無理にでも少し食べ、真昼は家を出た。

駅までの道を歩きながら、ポケットの中の札に触れる。まだ入っている。

言う。

紙の感触は薄いのに、そこだけ重かった。

会社のビルは、昨日と同じ顔をしていた。

自動ドア。 受付の観葉植物。 少し冷えすぎたエントランス。
エレベーター前で交わされる、薄い朝の挨拶。

世界は、自分の小さな決意など関係なく動いている。

真昼はそのことに少し救われた。 自分の中では大事件でも、外
から見ればただの平日だ。 だからこそ、言えるのかもしれない。

デスクに着くと、先輩がいつも通りコーヒーを持ってきていた。

「おはよう。昨日遅くまで大変だったね」

「おはようございます」

真昼は返した。

先輩の口調は軽い。 悪意があるわけでもない。 だが、その軽
さが、昨日の出来事の輪郭を曖昧にする。

真昼は一瞬だけ、昨夜の自分を疑いそうになった。 もしかして
大げさだったのではないか。 少し嫌なことがあっただけで、騒
ぎにしようとしているのではないか。

その瞬間、ポケットの中の札が指先に当たった。

輪郭。

感情の強さではない。何が違うと感じたのか、その線だけは見失わない。

「課長、来たら声かけてください」

真昼は自分でも驚くほど普通の声で言った。

先輩は一瞬だけこちらを見たが、すぐにうなずいた。

「うん、分かった」

その「分かった」の中に、少しだけ何かを察した気配があった。

九時二十分。課長が出社した。

資料を置き、メールを開き、誰かと短く話したあと、真昼のほうを見た。

「小野さん、ちょっといい？」

会議室ではなく、小さな打ち合わせスペースだった。半透明のパーティションで区切られた、四人用の丸テーブル。開かれすぎておらず、閉じすぎてもいない場所。

それが課長らしいと思った。 大事にもしないが、完全に雑にも扱わない。

真昼はノートも資料も持たずに席を立った。 ポケットの中の紙だけを持って。

座ると、課長が先に口を開いた。

「昨日の件だよね」

「はい」

「どういう認識だったか、聞かせてもらっていい？」

思っていたより穏やかな入り方だった。

それが逆に難しかった。 怒られたほうが言いやすかったかもしれない。 穏やかさは、こちらの輪郭をまた曖昧にすることがある。

真昼は、一度だけ昨夜書いた紙を思い出した。

あの件は、私は納得していません。 今後同じ形になるなら、事前に相談してほしいです。

そのままでもいい。 うまく言おうとしなくていい。

「昨日の場で、私が前に出て謝る形になったことについて、私は納得していません」

言った瞬間、心臓が大きく打った。

課長の表情は動かなかった。ただ、目線だけが少し鋭くなる。

真昼は続けた。

「判断の経緯も共有されていないまま、私が説明と謝罪を引き受ける形になったので、正直困りました」

静かだった。

課長はすぐには返さなかった。机の上に組んだ手を見ている。その数秒が長い。

真昼は逃げたくなった。ここで「でも私も未熟だったので」などと付け足せば、空気は丸くなる。場は収まる。いつもの自分なら、そうしていた。

でも、それを言った瞬間に、昨日から取り戻しかけた輪郭がまた滲む気がした。

真昼は口を閉じたまま待った。

課長がようやく言った。

「そう感じたのは分かった。こちらとしては、あの場を早く収める必要があった」

予想通りの言葉だった。

正当化。 事情の説明。 組織の都合。

真昼の胸の奥で、小さく火がつく。

「それは分かります」

自分でも驚くほど落ち着いていた。

「でも、早く収める必要があることと、誰がどう説明するかは別だと思っています」

課長が初めて少し黙った。

真昼は続けた。

「私が前に出る必要があるなら、事前に一言ほしかったです。少なくとも、何をどう説明するのか認識を合わせたかったです」

言い終わると、手のひらがじっとりしていた。

これ以上は言いすぎだろうか。 いや、まだ全然足りないのではないか。 頭の中で両方の声が騒ぐ。

だが課長は、思ったほど強く反発しなかった。

「……たしかに、そこは急ぎすぎたかもしれない」

真昼は瞬きをした。

反省、ではない。謝罪、でもない。だが、否定一色でもなかった。

課長は少し視線を落としたまま続けた。

「部長があの中で、担当が説明したほうがいいと言って、その流れになった。自分もその場で止めなかった」

そこまで聞いて、真昼は妙な感覚になった。昨日の会議室で、巨大で一枚岩に見えた出来事が、少しずつ人間の判断の集まりに戻っていく。

部長がいて、課長がいて、流れがあって、止めない選択があった。絶対的な運命ではない。ただの判断の連鎖だった。

それは救いでもあり、腹立たしさでもあった。

「次からは、そういう場がありそうなら、事前に共有します」

課長は言った。

そして、少し間を置いてから付け加えた。

「昨日は、負担をかけたと思う」

その言葉は、謝罪としては小さい。けれど、ゼロではない。

真昼は、自分の中のどこかが少しだけほどけるのを感じた。

完璧な勝利ではない。気持ちよく終わる話でもない。でも、何も言わなかった世界線とは違う場所に、たしかに來ている。

「ありがとうございます」

そう言ったあと、真昼は一瞬迷った。

ここで終えるか。それとももう一歩言うか。

昨日の店、明日の店、今の店。それぞれの言葉が、胸のどこかに浮かぶ。

輪郭。本気。支払い。

真昼は、もうひとつだけ言った。

「あと、私が未熟な点があるのは分かっています。でも、責任の持ち方については、今後もう少し整理したいです」

課長は真昼を見た。

その目は、少しだけ今までと違った。扱いやすい若手を見る目ではなく、面倒でも一応一人の当事者として見る目に近かった。

「……分かった。そこは整理しよう」

会話はそこで終わった。

劇的ではない。拍手もない。課長が急に良い上司になるわけでもない。

けれど真昼は、席に戻るまでの数歩のあいだ、自分の足の裏がちゃんと床を踏んでいる感じがした。

デスクに戻ると、先輩がちらりと見た。

「大丈夫だった？」

真昼は少しだけ考えてから答えた。

「大丈夫かは分かりませんが、言いたいことは言いました」

先輩は目を丸くしたあと、小さく笑った。

「そっか」

それだけだった。深く聞いてこない。それもまた、ありがたかった。

午前の仕事を進めながら、真昼は何度か自分の内側を確認した。怖さはまだ残っている。気まずさもある。課長にどう思われたかも分からない。これが評価にどう響くかなんて、なおさら分からない。

でも、自分に対する失望は、少し薄かった。

それは予想外だった。

勇気を出したから高揚している、という感じではない。むしろ、やっと最低限の手続きを終えたような感覚だ。

昨日、自分の人生の契約書に、空欄のまま押しかけていた印鑑を、今日は少しだけ自分で持った。そんな感じだった。

昼休み、真昼はひとりで外に出た。

コンビニでおにぎりとお茶を買い、少し遠回りして商店街のほうへ歩く。もちろん平日の昼間にあの店が開いているとは思っていない。それでも、なぜか足が向いた。

商店街のはずれに着くと、昨日の店があったはずの場所には、古びた空き店舗があるだけだった。 白い紙も、引き戸も、何も無い。

向かいも同じだ。 瓶の棚も、暖簾も、見当たらない。

ただ、風で転がったらしい小さな紙片が、石畳のすみに引っかかっていた。

真昼はしゃがんで拾った。

白い、細い紙。 レシートのようにできて、印字はない。 けれど裏返すと、鉛筆で小さく一行だけ書かれていた。

返品は、痛みではなく、鈍さから始まる。

真昼はしばらくその字を見つめた。

痛みを感じることは、つらい。 でも、鈍くなることのほうが危ない。 嫌なことを嫌だと感じなくなり、違うことを違うと言えなくなり、自分の輪郭が削れていく。

昨日を売りたくなるのは、痛みのせいだ。 けれど本当に失ってはいけないのは、その痛みが示していた線なのだ。

真昼は紙を折りたたみ、財布の内側にしまった。

午後、部長から呼ばれた。

「今朝、課長と話したらしいね」

来た、と思った。

真昼は部長の席の前で立ち止まった。部長はモニターから目を離し、椅子を少し回した。

「何か不満があったのか」

言い方は柔らかい。だが、問いの中には「組織の中でどこまでを問題にするのか」という品定めがある。

ここが二度目の支払いだと、真昼は思った。

課長に言っただけでは終わらない。輪郭を見せると、それを測る人が出てくる。

真昼は答えた。

「不満というより、進め方について共有したかったです」

「進め方？」

「昨日のような場で、私が説明役になるなら、事前に認識合わせがほしいです」

部長は少し笑った。

「でも、現場では臨機応変さも必要だよ」

その笑い方が、昨日の自分なら一番弱くなるポイントだった。
正論の形をした曖昧さ。 柔らかい口調で、線をぼかしてくる感じ。

真昼は自分の呼吸を一度だけ整えた。

「はい。臨機応変さは必要だと思います。ただ、その場の対応と、その後の整理は別だと思っています」

部長の笑みが少しだけ薄れた。

「私は、昨日の件で自分の役割が曖昧なまま前に出たので、そこは整理したいです」

静かになった。

一秒。 二秒。

やがて部長は、興味を失ったように肩をすくめた。

「分かった。そこまで言うなら、今後は少し丁寧にしよう」

勝った、とは全然思わなかった。 だが、飲み込まれもしなかった。

「ありがとうございます」

真昼は頭を下げて離れた。

席に戻る途中、不思議なくらい涙が出そうになった。 悔しいからではない。 嬉しいからでもない。



たぶん、昨日までの自分が、ああいう場でどれだけ黙っていたかを身体が思い出したのだ。

定時を少し過ぎて会社を出た。

空はまだ少し明るい。 夕方の風が、朝よりやわらかい。

真昼は駅とは逆の方向へ歩いた。 商店街へ向かうでもない。
ただ、少し遠回りしたかった。

交差点を渡ったところで、ふとショーウィンドウに映る自分が見えた。 顔は疲れている。 すっきりともしていない。 たぶん今日の会話を反芻して、夜にまたぐるぐるするだろう。

それでも、昨日の自分とは違った。

軽くはない。 でも、空っぽでもない。

ポケットに手を入れると、札がまだあった。 取り出してみる。

言う

その文字は少し薄くなっていた。 まるで、一度使われた切符みたいに。

真昼は立ち止まり、札を裏返した。

裏には何もないと思っていた。 だが、夕方の光に透かすと、うっすら別の文字が浮かんでいる。



次は、自分で選べます。

真昼は、ふっと笑った。

あの店は、やはり通い詰める場所ではないのだろう。ずっと店に頼っていたら、選ぶことそのものがまた外注になる。最後は自分でやるしかない。

そう思って札をしまおうとしたとき、道の向こうに見覚えのある白い紙が目に入った。

小さな古本屋の前。 張り紙が一枚。

「一昨日の相談、承ります。」

真昼は目を細めた。

昨日でもなく、明日でもなく、今でもなく、今度は一昨日。

「増えてる……」

思わずつぶやく。

この商店街は、どこまで時間を細かく刻むつもりなのだろう。

風が吹き、張り紙が揺れた。その奥で、見覚えのある白いシャツの袖がちらりと見えた気がする。

真昼は立ち尽くしたまま、少しだけ笑ってしまった。

時間には、まだいろんな店がある。でも今日は、もう行かなくていい。

今日はちゃんと、今日の分を使ったから。

真昼は踵を返し、駅へ向かった。

その背中を、夕方の光が長く伸ばしていた。

第五話 一昨日の相談

それから三日、真昼はあの張り紙のことを忘れられなかった。

一昨日の相談、承ります。

昨日を売る店。明日を預かる店。今を選ぶ店。どれも理屈ではないのに、妙に筋が通っていた。

だとすると、一昨日の相談とは何なのだろう。

昨日はまだ近い。痛みの熱が残っている。だが一昨日になると、少し事情が変わる。感情が一段落し、「まあ仕方ないか」と整理され始めるころだ。怒りも悲しみも、まだ消えてはいないのに、日常に紛れて処理されていく。

そして、たいていのもものはそのまま埋まる。

真昼は月曜の昼休み、結局また商店街へ向かった。

理屈ではやめたほうが良いと思っていた。あの店たちは、頼りすぎるとたぶんよくない。自分の時間の扱いを、また外注することになる。

けれど今回は、少し違う気もしていた。

昨日の件は、言った。職場での一件について、自分の輪郭は示した。だがそれだけでは説明のつかない疲れが、まだ残っている。

課長に言えたあとも、部長に言えたあとも、すっきりしなかった。なぜなら、あの日だけが問題ではないと薄々分かっていたからだ。

あれは、積み重なったものの表面だった。

真昼は古本屋の前に立った。

以前は気づかなかった狭い入口が、本の平台の陰にある。白い紙は確かに貼ってあった。文字は同じく、素っ気ない。

一昨日の相談、承ります。

真昼はため息をつき、小さな扉を押した。

中は、意外にも明るかった。

昨日の店のような静けさでもなく、今を選ぶ店のような無駄のなさでもない。古本屋の奥に、そのままうひとつ部屋が続いているような空間だった。

壁一面に本棚がある。だが本だけではない。ファイル、箱、古い手紙の束、伝票のようなもの、写真立て、メモ帳、壊れたキーホルダー。誰かの生活の周辺物が、分類される直前の状態で積まれている。

紙の匂いがした。乾いた、少し懐かしい匂い。



カウンターの向こうには、女がいた。

丸眼鏡をかけ、髪を後ろでひとつに束ねている。生成りのシャツに紺のカーディガン。年齢は三十代後半くらいに見えるが、やはりはっきりしない。机の上で何かを糸で綴じていた。

真昼が入ると、女は顔を上げた。

「ああ、来た」

「待ってたみたいに言いますね」

「だいたい来る人は分かる」

この商店街は、そういう人しかいないのかもしれない。

「ここは、一昨日の相談の店ですか」

「そう」

女は綴じていた紙束を閉じた。

「座って。ここは少し長くなるから」

真昼は木の椅子に座った。机の上には、すでに二つのものが置かれていた。

小さな虫眼鏡。 それと、糸のついたしおりのような細長い紙片。

「何をする店なんですか」

女は眼鏡を少し押し上げた。

「一昨日を相談する」

「それは分かるんですけど」

「昨日の出来事が、昨日だけの話じゃないときに来る場所」

それで、だいたい理解できた。

女は続けた。

「昨日の痛みは鮮度がある。だから人は、昨日そのものを売りたいくなる。 でも一昨日になると、少し頭が回り始める。あのとき本当につらかったのは、何が起きたからか。何が繰り返されていたからか。なぜあんなに自分が弱ったのか。そういう“背景”が見え始める」

女の指が、机の上の虫眼鏡に触れた。

「ここで扱うのは、出来事じゃなくて、文脈」

真昼は、ゆっくり息を吐いた。

それだ、と思った。

今回の件でつらかったのは、会議室で謝らされたことだけではない。もっと前から、似たようなものがあった。

急に仕事が落ちてくる。説明が足りない。誰かの判断ミス、現場の“調整力”で吸収することが前提になっている。感謝より先に「若いから」「経験になるから」で済まされる。違和感を言語化する前に、日常に埋め戻される。

だから、あの日だけを切り出しても、自分の疲れ方と合わないのだ。

「なるほど……」

真昼がつぶやくと、女はうなずいた。

「でしょう」

「相談って、何を相談するんですか」

「一昨日の扱い方」

「扱い方」

「昨日は傷口。明日は荷物。今は選択。一昨日はね、地層なの」

女はそう言って、机の引き出しから薄い紙を一枚出した。

白紙に、横線が何本も引かれている。地層の断面図みたいだった。

上から順に空欄があり、脇に小さく項目名が書かれている。

- 直近の出来事
- 似ていた出来事
- そのとき飲み込んだ言葉
- そこで覚えた役割
- 今回強く反応した理由

真昼はそれを見て、少し笑ってしまった。

「急にワークシートっぽいですね」

「ここは一番事務的な店だから」

たしかに、空気にロマンがない。だが、その分ごまかしも効かなそうだった。

「書くんですか」

「話してもいいけど、書いたほうが見える」

女は鉛筆を差し出した。

真昼は紙を見つめた。

最初の欄には、すぐ書ける。

直近の出来事： 会議で経緯共有なしのまま、自分が説明・謝罪役になった。

そこまでは早かった。

だが二つ目で、鉛筆が止まる。

似ていた出来事。

似ていたことは、いくつもある。 小さいものばかりだ。 でも、小さいから埋まった。

チャットで急に振られた案件。 顧客対応の最後だけ任されたこと。 曖昧な指示の尻ぬぐい。 「ちょっとお願い」と言われて断れなかったこと。 担当範囲の境界が、相手の都合で毎回少しずつずれること。

真昼は三つほど書いた。

書いてみると、どれも一件では大したことがない。だが並ぶと、はっきりとひとつの傾向になる。



「その顔、いいね」

女が言った。

「いい顔ではないと思いますけど」

「“一回の不運”だと思ってたものが、“繰り返されていた形”に見えた顔」

真昼は紙から目を離せなかった。

三つ目。

そのとき飲み込んだ言葉。

ここが、一番いやだった。

「そんなの、覚えてないですよ」

「覚えてるよ。言葉そのものじゃなくても」

真昼は眉を寄せた。

飲み込んだ言葉。

「それ、今言われても困ります」 「担当の範囲、違いますか」
「急すぎます」 「最初から共有してほしかったです」 「私が
受ける前提で話さないでください」 「“若いから”は理由になり
ません」

鉛筆が、少し強く紙を削った。

書いていて恥ずかしくなる。 自分が小さいことを気にしている
ようにも見える。 でも、女は何も言わない。

「こういうのって」

真昼は小さく言った。

「一個ずつだと、言うほどでもない気がしてしまうんです」

「うん」

「でも、重なるとかなりいやで」

「うん」

「なのに、重なってから言うと、“なんで今さら”になる」

女はその言葉に、初めて少し笑った。

「一昨日の典型だね」

「典型なんですか」

「ものすごく」

女は机に肘をつかずに、まっすぐ座ったまま言う。

「人は、はっきり傷つけられたときより、少しずつ境界を越えられたときのほうが、自分の違和感を疑う。一回なら我慢できる。二回でも、まあある。三回目でようやく変だと思う。でもそのころには、自分の中で“これくらいは飲む人”という役割が育ってる」

真昼は四つ目の欄を見た。

そこで覚えた役割。

役割。

その言葉に、少しぞっとする。

ただ我慢した、ではない。 繰り返すうちに、自分はある振る舞いを覚えてしまう。 先回りして飲み込む。 波風を立てない。 困った顔をしない。 あとで疲れる。

真昼は、ゆっくり書いた。

そこで覚えた役割： 曖昧なことを引き受ける人。 場を悪くしない人。 あとから自分で処理する人。

鉛筆を置いたとき、女は机の上のしおりをつまんだ。

「それ」

「何ですか」

「仮の役名を書いて」

「役名？」

「自分が知らないうちに演じていた役」

真昼は少し迷ってから、しおりに書いた。

“都合よく調整できる人”

字にすると、思ったよりきつかった。

女はしおりに受け取り、一度だけ眺めたあと、机の上に置いた。

「ぴったりだね」

「うれしくないです」

「役名って、だいたいうれしくない」

それはそうだ。

「じゃあ最後」

女はワークシートの一番下を指差した。

今回強く反応した理由。

真昼は紙を見つめた。

今回、なぜあんなにきつかったのか。

ただ会議で謝ったからではない。ただ理不尽だったからでもない。

たぶん、自分の中で何かが見えたからだ。「ああ、自分はまたこれやる人として置かれている」と。そして、それに自分も協力しかけたからだ。

真昼は、時間をかけて書いた。

今回強く反応した理由：このままだと、自分が“そういう扱いでいい人”になってしまうと感じたから。

書き終わると、女が静かに息を吐いた。

「はい、相談の核が出た」

真昼は顔を上げた。

「核」

「君が相談したいのは、会議の件じゃない。“自分がそういう扱いでいい人に固定されていくこと”だよ」

その一言で、頭の中のいろいろな線が一本になった。

そうだ。

つらかったのは、謝罪役になったことそのものよりも、その配置が自分の中で“いつもの延長”に見えてしまったことだ。このまま数年経ったら、自分はずっと自然にそういう役を受けるようになる。そして、受けることに慣れてしまう。

それが怖かったのだ。

「……じゃあ、どうしたらいいんですか」

女はすぐには答えなかった。代わりに虫眼鏡を真昼のほうへ押しした。

「もう一回、自分で見て」

「何を」

「その紙。出来事じゃなく、パターンとして」

真昼は虫眼鏡をのぞいた。もちろん紙の文字が少し大きく見えるだけだ。なのに、不思議と印象が変わる。

直近の出来事。似た出来事。飲み込んだ言葉。覚えた役割。強く反応した理由。

その並びを見ていると、問題は“誰かが悪い”だけではないと分かる。もちろん相手側の構造にも問題はある。だが同時に、自

分が境界を言語化せず、曖昧なまま引き受けてきたことも、この役割を育てた。

「気づいた？」

女が訊く。

「……はい」

「何に」

「私は、被害者だけじゃなくて、共犯でもあった」

言ってから、少し痛かった。

責めたいわけではない。でも、そう言うしかない。

女はうなずいた。

「一昨日の相談は、そこまで行けると次に進める」

「次って」

「役を降りる準備」

その言葉に、真昼は少し身を引いた。

「すぐ降りられないです」

「知ってる」

女はあっさり言った。

「長くやった役ほど、急には降りられない。周りも驚くし、自分も不安定になる」

「じゃあ」

「ここで決めるのは、“役を降りる宣言”じゃなくて、“役を続ける条件を変える”こと」

また、絶妙に地味だった。でも、この商店街らしい。

女は新しい紙を出した。今度は三行しかない。

○ 今後、引き受ける前に確認すること

○ 飲み込まずに一度言うこと

○ まだすぐには変えられないこと

「現実的ですね」

「一昨日は現実の店だから」

真昼は苦笑しながら書いた。

今後、引き受ける前に確認すること： 担当範囲、目的、誰が責任を持つか。

飲み込まずに一度言うこと： 事前共有がないと困ること。 担当が曖昧なままは受けられないこと。

まだすぐには変えられないこと： 会社全体の体質。 上司の考え方。 自分が緊張すること。

書き終わると、女はその紙を見て、珍しく少しだけ満足そうにした。

「いいね。最後の行があるのがいい」

「最後？」

「まだすぐには変えられないこと」

女は指先でその行を軽く叩いた。

「一昨日を整理するとき、人はすぐ“全部変えなきゃ”に飛びがち。でも実際には、変えられるのは境界の示し方とか、確認の仕方とか、小さい接点から」

真昼はうなずいた。

全部を変えるのではなく、自分の参加の仕方を変える。 そのほうが、今の自分には現実的だった。

「相談料」

女が言った。

真昼は顔を上げた。

「いるんですか」

「いるよ。ここ無料に見えた？」

この商店街、無料の店が一つもない。

「いくらですか」

女は少し考えたあと、しおりを差し出した。

そこには、真昼が書いた役名がある。

“都合よく調整できる人”

「これ、置いていって」

真昼はしおりを見た。

「置いていく？」

「完全には無理だよ。でも、少なくとも“本名”みたいに持ち歩くのはやめる」

その言い方が妙に響いた。

たしかに、自分はこの役を、外から押しつけられていただけでなく、どこかで名札のように首から下げていたのかもしれない。私はそういう人。私は調整する側。私は我慢する側。私は空気を壊さない人。

それを一度、机に置く。

真昼はしおりを女に渡した。

女はそれを受け取り、本のあいだに挟んだ。



「相談完了」

「そんな簡単に」

「簡単じゃない。ここから外で少しずつ効いてくる」

真昼は立ち上がった。

帰る前に、ひとつだけ気になっていたことを訊いた。

「一昨日の次は、何があるんですか」

女は眼鏡の奥で少し笑った。

「前々から、って店」

「本当にありそうだからやめてください」

「あるよ」

真昼は顔をしかめた。

女は楽しそうでもなく、ただ事実として告げる。

「一昨日はパターンを見る場所。 前々からは、もっと古い癖とか、最初に覚えた役の出どころを見る場所」

「行きたくないです」

「そういう人ほど、だいたいそのうち行く」

真昼はため息をついた。

この商店街は、人の時間を細かく刻みすぎる。

外へ出ると、昼の光が少し眩しかった。 古本屋の平台には、何事もなかったように文庫本が並んでいる。 通りを歩く人も、パン屋の匂いも、いつも通りだ。

真昼はバッグの中の紙を確かめた。

全部を変える必要はない。でも、境界の示し方は変えられる。確認の仕方は変えられる。飲み込む前に、一度止まることはできる。

その程度のことが、案外、一昨日を変えていくのかもしれない。

商店街の角を曲がると、掲示板に新しい紙が風で揺れていた。

「前々からのお悩み、木曜のみ。」

真昼は立ち止まった。

「木曜限定なんだ……」

なぜかそこだけ、妙に具体的だった。

真昼は苦笑して、歩き出した。

今日はまだ、行かない。でも、たぶん、見てしまった以上は終わらない。

背中のうしろで、古本屋の鈴が小さく鳴った。

第六話 前々からのお悩み

木曜まで、真昼は二度ほど「行くのはやめよう」と思った。

一昨日の店で整理したことは、たしかに少し効いていた。仕事を振られたとき、以前より一拍置いて確認するようになった。曖昧な頼まれ方をしたときも、「どこまでを想定していますか」と聞ける場面が一度あった。たったそれだけなのに、妙に疲れた。

疲れた、ということは、前と違う筋肉を使ったのだろう。

それで十分ではないか。これ以上、わざわざ昔のことまで掘り返さなくていいのではないか。

真昼はそう考えた。だが、木曜の朝、電車の窓に映る自分を見たとき、ふと分かった。

自分は今、「確認する」「言う」を少し覚え始めている。でもそのたびに、必要以上に緊張する。たった一言の確認でも、相手に嫌われるような感覚が走る。ただの業務上のやりとりが、どこかで“関係の危機”みたいに感じられる。

それは、職場だけの問題ではない気がした。

真昼はその日の帰り、木曜限定の張り紙があった場所へ向かった。

商店街のはずれでも、古本屋の奥でもない。意外にも、そこは小さな文房具店の裏口だった。昼間は普通に営業していた店で、ノートや封筒や万年筆が並んでいた。だが閉店後になると、脇の細い通路の先に、見覚えのある白い紙が立てかけられている。

前々からのお悩み、木曜のみ。

木曜のみ、というのが嫌に本気だった。

真昼は小さな通路を進み、半分だけ開いた引き戸を押した。

中は、静かだった。

これまでの店の中で、いちばん静かかもしれない。昨日の店のような沈みではない。明日の店のような張りつめでもない。もっと、雪が積もった朝みたいな静けさだった。



部屋は広くない。畳敷きで、中央に低い机。棚には文箱や便箋、古いアルバム、色の抜けたリボン、何年も前に使われたらしい名札のようなものが並んでいる。壁には何もかかっていない。時計もない。

机の向こうにいたのは、老女だった。

小柄で、背筋がまっすぐ伸びている。白髪をきっちりまとめ、薄い鼠色の着物に濃紺の羽織を重ねている。手元では、何か布の端を静かに縫っていた。

真昼が入ると、老女は縫い針を置いた。

「いらっしやい」

声は小さいのに、よく通った。

「木曜だけなんですね」

真昼は、思っていたことをそのまま言ってしまった。

老女は少しだけ口元をゆるめた。

「毎日開けると、来すぎる人が出るからね」

それは、どの店より怖い説明だった。

「ここは……前々からのお悩みの店」

「そう」

老女はうなずいた。

「一昨日は繰り返しを扱う。ここは、その繰り返しの最初の型を見に行く場所」

真昼は腰を下ろした。

「型」

「癖でもいいし、反応でもいいし、覚えた身の守り方でもいい」

老女は湯呑みをひとつ置いた。 薄いお茶の香りがした。

「職場で起きたことを見にきたつもりでも、ここではたいてい、
もっと前の話になる」

真昼は目を伏せた。

予想はしていた。 だから来たくなかったのだ。

「昔のことって、そんなに関係ありますか」

「昔のことそのものが問題とは限らないよ」

老女は静かに言った。

「でも、人は早い時期に、自分が人の中でどうやって安全を確保するかを覚える。 空気を読む。先回りする。役に立つ。黙る。笑う。怒らない。それが昔は助けになった。 でも大人になっても同じ型だけで生きていると、合わない場面で苦しくなる」

真昼は、言い返せなかった。

それは、まるで自分のことだった。

「何をするんですか、ここでは」

老女は、机の上に小さな封筒を三枚並べた。どれも無地で、表にひとことずつ書かれている。

家 学校 最初の仕事

「どれか開ける」

「そんな占いみたいな」

「占いじゃない。だいたいこの三つのどこかに、型の原型がある」

真昼は封筒を見つめた。

家。 学校。 最初の仕事。

どれもありそうだった。だが、ぱっと目が止まったのは**家**だった。

その文字を見た瞬間、なぜか少しだけ肩が固くなる。

「それだね」

老女が言った。

「まだ選んでませんけど」

「もう体が選んでる」

真昼は観念して、**家**と書かれた封筒を取った。

中には、小さなカードが一枚入っていた。そこには質問が三つだけ書かれている。

- 子どものころ、家で機嫌を悪くさせたくなかった人は誰か
- その人に対して、よく使っていた自分の振る舞いは何か
- その振る舞いは、今もどこで生きているか

真昼は、うわ、と思った。

あまりにも直球だった。

「こんな……」

「前々からは、遠回しにしない」

老女の声はやわらかい。だが逃がさない。

真昼はカードを見つめた。

機嫌を悪くさせたくなかった人。

父、というほど単純ではない。 母、というほど一方的でもない。
家全体の空気、かもしれない。 誰かひとりというより、“波が立
つこと”そのものを避けていた気もする。

「ひとりじゃなくてもいい」

老女が言う。

「家の空気でも」

真昼は、少しだけほっとした。

「……家の空気、です」

「どんな空気」

「忙しい、というか。余裕がない感じです」

言いながら、昔の夕方が少し浮かんだ。 食事の支度の音。 疲
れた声。 何かを頼むタイミングを計る感じ。 誰かがぴりつい
ていると、家全体が少し狭くなる感じ。



大きな暴力や、分かりやすい恐怖ではない。でも、子どもはそういうものに敏感だ。

「それで、どうしてた」

真昼は少し考えた。

「……邪魔しないようにしてたと思います」

「ほかには」

「なるべく自分でやるとか」

「ほかには」

「頼みごとをする前に、相手の機嫌を見る」

言葉にしていくうちに、胸のどこかが冷えていく。

老女は、ただうなずいた。

「いい子だったんだろうね」

その言い方に、真昼は少しだけ顔をしかめた。

「それ、褒められてる感じがしません」

「褒めてないからね」

老女はきっぱり言った。

「子どものときに必要で覚えたことと、大人になって褒められることは別だ」

真昼は黙った。

二つ目の問い。

その人に対して、よく使っていた自分の振る舞いは何か。

これはもう書けた。

空気を見る。 頼る前に引く。 困らせない。 自分で処理する。

書いた字を見て、一昨日の店で書いた役割とほとんど同じだと気づく。

曖昧なことを引き受ける人。 場を悪くしない人。 あとから自分で処理する人。

職場で突然生まれた役ではなかったのだ。

もっと前から、なじみのある動きだった。

「つながったね」

老女が言った。

真昼はうなずいた。

「でも、別に家が悪かったとか言いたいわけじゃないです」

少し早口になっていた。

「みんなそんなものかもしれないし、普通だったと思うし」

老女はそれをさえぎらなかつた。 ただ、しばらくしてから静かに言った。

「誰かを悪者にする必要はない」

真昼は口を閉じた。

「前々からのお悩みでよくある間違いは、原因探しを犯人探しにしてしまうことだよ。でもここで見るのは、善悪じゃない。自分がどんな場で、どうやって安全を作ってきたか、その型」

その言葉で、少し力が抜けた。

そうだ。別に家族を裁きたいわけではない。ただ、自分の反応の原型を知りたいのだ。

三つ目の問い。

その振る舞いは、今もどこで生きているか。

真昼は、ゆっくり書いた。

上司との会話。頼みごとを断る場面。不機嫌そうな人がいる場。説明不足でも先回りして埋めようとするとき。

書き終わると、老女は手元の布を裏返した。縫い目が内側に入って、表からは見えなくなる。

「こういうことだよ」

「何がですか」

「昔の身の守り方は、今は服の裏地みたいに内側に入ってる。
表からは見えにくいけど、形を決めている」

真昼はその布を見た。

表地ではない。でも着心地を決めるもの。

たしかに、自分はいつも“相手の機嫌を悪くさせないように動く”
ことを、ただの性格だと思っていた。気が利くとか、配慮があ
るとか、そういう言葉で説明していた。でもそれは、もっと古
いところで覚えた安全確認でもあったのだ。

「じゃあ、どうしたらいいんですか」

また同じことを聞いていると思いながら、それでも聞かずにいら
れなかった。

老女は少し考えてから、引き出しから小さな札を出した。これ
までの店の札より、もっと小さい。

そこにはこう書かれていた。

今の相手は、あのころの空気ではない。

真昼はそれを見つめた。

簡単な文だった。でも、簡単すぎるぶん刺さる。

「確認札だよ」

老女は言った。

「昔の型が動き始めたとき、自分に見せる」

「そんなので変わりますか」

「すぐには変わらない。でも、人は反応の最中には、時代を混同するからね」

時代を混同する。

それは、すごく正確な言い方に思えた。

上司が不機嫌そうに見えたとき。説明不足の仕事が落ちてきたとき。誰かに確認やお願いをするとき。今の自分は大人で、状況も家の夕方ではないのに、体だけが昔の空気を思い出して縮む。

その混同を解く札。

「もうひとつ」

老女は白い紙を出した。

「ここで一文だけ、書いていきなさい」

「何を」

「子どものころの自分に、今の自分から渡す文」

真昼は、少しだけためらった。

そういうのは苦手だった。安っぽくなりそうで。でも、この店ではごまかしても意味がない気がした。

鉛筆を持ち、しばらく考える。

そして、書いた。

もう、先に空気を読んで自分を小さくしなくていい。

書いた瞬間、涙が出るとか、胸が熱くなるとか、そういうことはなかった。ただ、静かに、ああ、と思った。

自分は長いこと、先に小さくなることで安全を確保していたのだ。

老女はその紙を読まなかった。折りたたんで、小さな封筒に入れて返してきた。

「自分で持っておきなさい」

「読まないんですか」

「読まなくていい。これは君あてだから」

真昼は封筒を受け取った。

「相談料は」

老女は一瞬だけ考えたあと、机の端に置いてあった古い名札を指さした。裏返してあるが、表に何か書いてあるのが分かる。

「それを見て」

真昼は名札を裏返した。

そこには、手書きでこう書かれていた。

いい子

真昼は思わず息をのんだ。

「これ、置いていきなさい」

老女が言う。

「“いい子”であること自体が悪いんじゃない。でも、それを安全札みたいに胸にぶら下げ続けると、大人になってから苦しくなる」

真昼は名札を見つめた。

いい子。 困らせない。 自分でやる。 空気を見る。 先に引く。

それは昔、たしかに役に立った。 でも今は、自分の輪郭を削ることがある。

真昼は名札を机に置いた。



老女はそれを引き寄せ、文箱の中にしまった。

「これで少し軽くなる」

「そんなに簡単ですか」

「簡単ではないよ」

老女は穏やかに言った。

「ただ、型は見えると少し弱くなる」

それは、一昨日の店でも聞いたことに似ていた。 パターンは、見えるだけで少し変わる。

立ち上がろうとしたとき、真昼はふと訊いた。

「学校の封筒とか、最初の仕事の封筒も、みんな開けるんですか」

老女は少しだけ笑った。

「全部開ける人もいる。 ひとつで十分な人もいる。 でもたいてい、どれかひとつを開けると、ほかの封筒の見当もつく」

真昼は **学校** と **最初の仕事** の封筒を見た。

たしかに、そこにも何かあるのだろう。でも今日はもう十分だった。

外へ出ると、夜風が少し冷たかった。文房具店のショーウィンドウには、便箋や封筒がきちんと並んでいる。何事もなかったような顔で。

真昼は札と封筒をバッグに入れた。

今の相手は、あこのころの空気ではない。

この一文は、すぐに効く魔法ではない。でも次に誰かの機嫌に先回りして縮みそうになったとき、たぶん思い出せる。

駅へ向かう途中、商店街の掲示板の前で足が止まった。

また新しい紙が増えている。

「まだ平気、の見立て承ります。」

真昼は目を細めた。

「まだ平気、まであるの……」

それは、今までで一番いやな名前の店だった。

だって、人が一番自分をごまかす言葉だからだ。 まだ平気。
まだ大丈夫。 まだ我慢できる。 まだ倒れるほどではない。
まだ言うほどでもない。

真昼はしばらくその張り紙を見ていたが、やがて小さく息をついた。

今日は行かない。 でも、いずれ行くのかもしれない。

この商店街は、時間だけでなく、言い訳の名前まで知っている。

真昼は歩き出した。 夜の道は静かだった。

昔の型はすぐには消えない。 でも、名札を置いてきたぶん、少しだけ首もとが軽かった。

第七話 まだ平気、の見立て

真昼は、その張り紙を三日見ないふりをした。

まだ平気、の見立て承ります。

嫌な名前だった。 昨日、明日、今、一昨日、前々から。 どの店も時間を扱っていた。けれど今度のそれは、時間ですらない。

言い訳だ。

人が自分に使う、いちばん便利で、いちばん危ない言葉。

まだ平気。

真昼はその言葉を、あまりにもよく知っていた。 仕事が重なったとき。 少し眠れない日が続いたとき。 相手の雑な振る舞いに引っかかっても、「まあ、これくらい」と流したとき。 本当は疲れているのに、倒れていないから大丈夫だと思ったとき。

限界ではない。だから問題ない。　そうやって、自分の削れ方をいつも過小評価してきた。

それでも、今回ばかりは行かないつもりだった。

これ以上この商店街の店を回るのは、少し危ない気がしていた。自分の内側を見すぎると、現実の手触りが薄くなる。　しかも、この店の名前はよくない。　見てもらわなくても、まだ平気なのだから。

その週の金曜、真昼は昼過ぎから微熱っぽかった。　倒れるほどではない。　だが資料の文字が少しだけ遠く見える。　肩がずっと上がっている感じがする。　昼休みに食べたものの味も、きちんと入ってこない。

それでも仕事はできた。　課長とも普通に話した。　会議でも相槌を打てた。　夕方には、先輩から「小野さん、最近ちょっと強くなったね」と冗談めかして言われて、真昼は笑って返した。

笑えた。　帰れる。　倒れていない。　泣いてもいない。

だから、まだ平気のはずだった。

夜、駅を降りたとき、足が商店街のほうへ勝手に曲がった。

店は、これまでと違って妙に目立つ場所にあった。

商店街のちょうど真ん中。昔、チェーンの薬局が入っていて、数年前に閉店したまま空いていた大きめのテナント。シャッターの半分だけが開いていて、白い紙が貼ってある。

まだ平気、の見立て承ります。

見立て、という言い方が医者っぽい。だが病院ほど公的ではなく、占いほど曖昧でもない。嫌に中途半端だ。

中に入ると、真昼は思わず立ち止まった。

広がった。

これまでの店はどれも狭く、個人的で、ひとりぶんの時間を扱うような場所だった。だがここは違う。もともと店舗だった空間をそのまま使っているらしく、天井が高く、床も広い。蛍光灯ではなく白い間接照明で、全体が明るすぎず暗すぎず照らされている。

そして、店の中にはものがほとんどない。

診察室のようでもあり、ギャラリーのようでもあり、避難所の受付のようでもある。中央に長机が一つ。その向こうに、男が座っていた。

白衣ではない。 グレーのニットに黒いパンツ。年齢は五十前後に見える。髪は短く、顔立ちは穏やかだが、妙に目だけが眠っていない。 机の上には帳簿でもパソコンでもなく、古いタイプの体重計みたいなものと、小さな砂時計が三つ並んでいる。

真昼が近づくと、男は視線を上げた。

「こんばんは」

声は低い。 よく響くが、脅かさない。

「ここは……」

「見立ての店です」

「まだ平気、の」

「ええ」

男はうなずいた。

「倒れてはいない。壊れてもいない。泣いてもいない。仕事にも行けている。 だから本人も周りも“まだ平気”だと思っている。そういう状態を見にくる場所です」

真昼は嫌な感じがした。 言葉が、あまりにも正確だったからだ。

「別に、今日はそんなに……」

言いかけると、男は小さく手を上げた。

「説明はあとで。まず、立ってください」

「何ですか」

「見立てですから」

男は体重計のような機械を足元へ押し出した。ただし目盛りは体重ではなく、見慣れない言葉で区切られている。

平熱 摩耗 鈍化 代償運転 破綻前

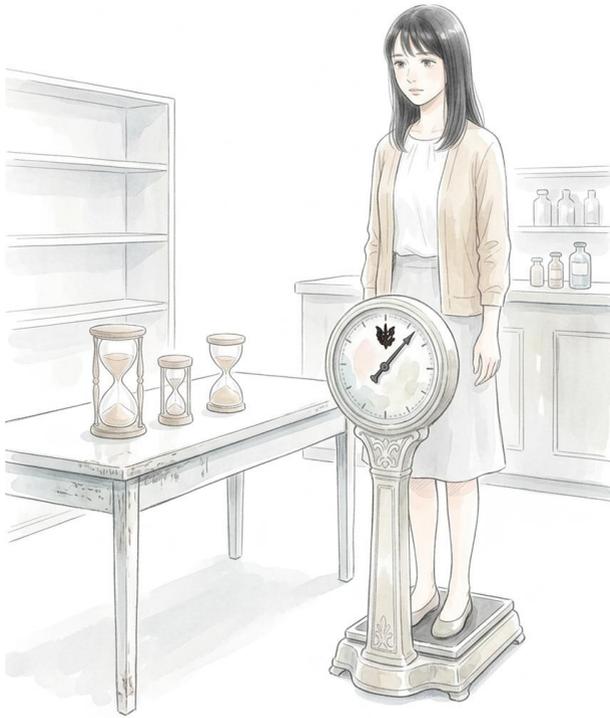
「ふざけてます？」

「いいえ」

男は真顔だった。

真昼はため息をつきつつ、その上に乗った。もちろん何かが物理的に測れるはずはない。だが足を置いた瞬間、小さくカチ、と音がして、針がゆっくり右へ動いた。

鈍化 と 代償運転 のあいだで止まる。



真昼は顔をしかめた。

「何これ」

「予想より悪くて腹が立つでしょう」

「腹が立つというか、失礼ですね」

「だいたい皆そう言います」

男はメモも取らずに言った。

「でも少し安心もしている。“自分のしんどさが、気のせいではなかった”と分かるので」

真昼は黙った。

たしかに、それは少しあった。

「代償運転って何ですか」

「無理が利いている状態です。休めてはいない。でも壊れてもいない。足りないものを、緊張や責任感や慣れで埋めて動いている」

男は机の上の一番小さい砂時計をひっくり返した。

「ここで倒れる人は少ない。むしろ厄介なのは、倒れない人です」

真昼はその言葉に反応してしまった。

「倒れないほうがいいじゃないですか」

「本人にとってはね」

男は淡々と返した。

「でも、倒れない人は限界が分からなくなる。壊れないことが指標になる。その結果、ずっと鈍ったまま進み、自分の削れたぶんを“普通の成長痛”だと思い込む」

真昼は少し寒くなった。

それは、怖い話だった。でも幽霊の話より、ずっと現実的で嫌だった。

「何をするんですか、ここで」

「見立ってます」

「だから、何を」

男は砂時計を指で止めた。

「限界かどうかではなく、“何を犠牲にして平気を維持しているか”を見る」

今までのどの店とも違う角度だった。

昨日を売る店は痛みを見た。 明日を預かる店は重さを見た。
今を選ぶ店は選択を見た。 一昨日の店は地層を見た。 前々か
らの店は型を見た。

この店は、支払っている代償を見る。

「診断票があります」

男は薄い紙を一枚出した。

だが、それはこれまでのワークシートとは違った。 質問ではな
く、二列の欄がある。

左には、日常の一場面。

- 休みの日、何もしたくない
- 人に会ったあと、長く回復に時間がかかる
- 仕事はできるが、面白さが減る
- “ちゃんとした反応”をするのが面倒
- 嫌だと感じる前に、自動で処理する

○ 以前好きだったものに触れる気力がない

○ 軽い雑談でも、どこか演技っぽい

○ 怒りより先に説明モードに入る

右の欄には、代償の種類。

**感情 好奇心 回復力 身体感覚 対人の自然さ 遊び 判断の
鋭さ**

真昼は紙を見たまま、少し笑ってしまった。

「嫌すぎる」

「そうですね」

「当たってる感じが」

「見立てですから」

男はまったく笑わなかった。

真昼は椅子に座り、その紙に目を落とした。

一つずつ丸をつけていく。

休みの日、何もしたくない。 ある。

人に会ったあと、長く回復に時間がかかる。 ある。

仕事はできるが、面白さが減る。 ある。

嫌だと感じる前に、自動で処理する。 かなりある。

軽い雑談でも、どこか演技っぽい。 それも、最近ある。

気づくと、紙の半分以上に印がついていた。

男はそれを見ても驚かない。

「なるほど」

「何がですか」

「あなたは“まだ平気”を、かなり上手に運転している」

嫌な褒められ方だった。

「で、何を犠牲にしてるんですか」

男は紙を指さした。

「主に、遊びと好奇心、それから身体感覚の初期段階」

「身体感覚？」

「疲れた、嫌だ、重い、眠い、楽しい、面倒だ、今日は会いたくない。　そういう小さな信号を、あなたはかなり後回しにして動ける」

真昼は納得してしまった。

それは長所だと思っていた。　やるべきことがあるなら、多少の気分は後回しにできる。　大人なんだから当たり前だと。

「長所でもありますよ」

真昼が言うと、男はうなずいた。

「もちろん。　代償運転は、悪ではない。　締切前、緊急時、誰かを守るとき、必要なこともある」

「じゃあ問題ないのでは」

「常用しているのが問題です」

その返しが速かった。

「非常用の回路を、平常時にも使っている」

店の空気が少し冷えた気がした。

男は続けた。

「だから今のあなたは、壊れてはいない。でも、壊れていないことの代わりに、“元気な自分の微細さ”を削っている」

真昼は、その言葉を理解するのに少し時間がかかった。

微細さ。

大きく倒れるわけではない。仕事もできる。泣き崩れるわけでもない。でも、好き嫌いの小さな差、面白い・つまらないの微妙な揺れ、人に会ったあとに本当はどうだったか、そういう細かい感覚が鈍っていく。

それは確かに、最近あった。

何を食べたいか分からない。何が面白いかすぐ答えられない。休日も気づくとただ回復だけで終わる。本を開いても、昔みたいに世界に入っていけない。

「……それって、結構いやですね」

「はい」

男は静かに言った。

「ただし、多くの人はそこでは来ません」

「じゃあどこで来るんですか」

「面白くなくなったあとです」

その返答は、妙に刺さった。

つらいからではない。 しんどいからでもない。 自分の人生が、ただ“面白くない運転”に変わってから人は気づく。

真昼は診断票を見つめた。

「で、どうすれば」

「ここでは処方を出します」

「急に病院っぽい」

「見立ての店ですから」

男は机の下から、小さな箱を取り出した。 薬箱みたいな形だが、中身は薬ではない。 いくつもの小さな引き出しにラベルが貼ってある。

休む 切る 戻す 遊ぶ 鈍さを認める 人を減らす 予定を空ける

真昼は眉を上げた。

「ざっくりしてますね」

「ここで細かい解決策を出すと、全部タスクになる」

それは、たしかにそうだった。

真昼みたいな人間は、回復すら ToDo に変える。

男は 戻す と書かれた引き出しを開けた。中には紙片が何枚か入っている。一枚を選んで差し出した。

そこにはこう書かれていた。

“平気かどうか”ではなく、“細かく感じられているか”で測ること。

真昼は読み返した。

「……指標を変えろってことですか」

「そうです」

男は初めて少しだけ表情をゆるめた。

「まだ働ける。まだ泣いていない。まだやれる。それでは遅い。今日は味がしたか。会話のあとで自分の気持ちが分かるか。疲れたとき、疲れたと認識できるか。面倒なものを面倒と感じられるか。そのあたりで測り直す」

真昼は、じわじわとその意味を理解した。

限界ではなく、感度で測る。

それは、今まで一度も持ったことのないものさしだった。

「もうひとつ」

男は遊ぶの引き出しを開けた。

出てきたのは、木でできた小さな独楽だった。色も塗られていない、ごく簡素なもの。

「これ、何ですか」

「処方」

「意味が分からない」

「回復に必要なのは、休養ではありません。遊びです」

「子どもじゃないんですから」

「だからこそです」

男の声が少しだけ硬くなった。

「代償運転が長い人は、休みの日すら“正しく休もう”とする。でも遊びは役に立たなくていい。上達しなくていい。誰にも説明できなくていい。何の成果にもならないのに、自分の感覚が少し戻るものです」

真昼は独楽を見た。

玩具なんて、いつ以来だろう。

「そんなので戻りますか」

「戻りません」

男は即答した。

「でも、戻らなさを知るために要る」

「……」

「今のあなたは、遊びの筋肉がかなり痩せている。だから“何しても楽しくない”と確認するだけでも大事です。感度が鈍っている事実を、失敗扱いせずを知るために」

それは、厳しいようできて少し救いがあった。

楽しめない自分を責めなくていい。ただ、感度が落ちていることを知る。

「相談料は」

真昼が聞くと、男は紙袋を差し出した。

中には何も入っていない。

「一つ、置いていってください」

「何を」

「“まだ平気”の中身を」

真昼は少し考えた。

“まだ平気”の中身。

しばらく黙って、ようやく言えた。

「……好きだったものが、そんなに好きじゃなくなっても、仕事
できてるから平気。 みたいなことです」

男はうなずいた。

「それを書いて」

真昼は紙袋に付いていた白い札に、鉛筆で短く書いた。

面白くなくなっても、回っているから平気。

書いた文字を見て、少し苦しくなった。 それはまさに、自分が自分にかけていた呪文だった。

男は札を外し、袋ごと箱に入れた。 箱の側面には、いくつもの札が貼ってある。

寝れば戻るから平気 日曜に休めば平気 泣いてないから平気
みんなこれくらいだから平気 前よりマシだから平気

どれも見覚えがあった。

「多いですね」

「人気の見立てです」

全然うれしくない人気だった。

帰ろうとすると、男が最後に言った。

「あなたは、壊れる手前ではありません」

真昼は振り向いた。

「でも、“面白くなくなる方向”にはかなり進んでいる。 それは、思っているより深刻です」

脅しではなく、見立てとして言っているのが分かった。

真昼は独楽と紙片を持ち、店を出た。

その夜、家で独楽を回してみた。

うまく回らない。二度目も倒れる。三度目でようやく少しだけ回り、テーブルの上でかすかに唸るような音を立てる。

ただそれだけだった。

感動もない。子どものころを思い出して泣くこともない。回ったから何、という気持ちもある。

でも、四度目を回そうとしたとき、ふと笑ってしまった。



下手すぎて。

それは大きな回復ではなかった。けれど、役に立たないことで一瞬だけ笑ったのは、たぶん少し久しぶりだった。

真昼は独楽を止め、しばらく指先に乗せていた。

“平気かどうか”ではなく、“細かく感じられているか”で測ること。

味。 疲れ。 面倒さ。 笑えたか。 少し嫌だったか ちゃんと退屈できたか。

そういう細かいものを、いままで真昼は「大したことではない」と思っていた。けれど本当は、そういう細かいものの束で人は自分の生活を感じているのかもしれない。

独楽をもう一度だけ回す。 今度は少し長く回った。

それを見ながら、真昼はふと思った。

もしかすると、自分は壊れることばかり怖がっていた。 けれど本当に怖いのは、壊れずに、そのまま鈍くなっていくことなのかもしれない。

翌日、昼休みに真昼はいつものコンビニではなく、小さな定食屋に入った。

別に特別な意味はない。 ただ、少しあたたかいものを食べたいと思ったからだ。

席について、メニューを見て、珍しく迷った。 どれでもいい、ではなく、今日は何を食べたいかを少し考えた。

生姜焼き。 いや、今日は魚かもしれない。 味噌汁がほしい。 そんな、あってもなくてもよさそうな迷いが、なぜか少し新鮮だった。

注文した焼き魚定食が来て、一口食べる。

熱い。 少ししょっぱい。 大根おろしが思ったより辛い。



それだけのことに、真昼は少し驚いた。ちゃんと味が入ってくる。

「……こういうことか」

小さくつぶやく。

まだ元気いっぱいではない。世界が急に輝いて見えるわけでもない。でも、細かく感じるものが少し戻ると、生活はただの作業じゃなくなる。

そのとき、スマホが震えた。先輩からのメッセージだった。

今日の夕方、軽くお茶でもどう？ この前の件、少し聞きたくて。

真昼は画面を見たまま少し止まった。

前なら反射で「大丈夫です、行けます」と返していた。でも今日は、一拍置いた。

本当はどうか。

疲れているか。 会いたいか。 今、その会話をしたいか。

真昼は自分の内側を探った。 完全に嫌ではない。 けれど、今日は少し静かに帰りたい気もする。

それは、以前なら拾わなかった小さな感覚だった。

真昼は短く返した。

ありがとうございます。今日は少し疲れているので、また来週でもいいですか。

送ったあと、少しだけ緊張した。 断るほどのことではないのでは。 感じ悪くないか。 また頭の中で古い型が動き出す。

でもすぐに返信が来た。

もちろん。また来週にしよう。

それだけだった。

真昼は、箸を持ったまましばらく画面を見ていた。

何も起きない。

誰も機嫌を悪くしない。世界も壊れない。ただ、自分が今日は少し疲れていると認めて、その通りにしただけだ。

その小ささが、逆に大きかった。

その夜、帰り道に商店街を通ると、見立ての店のシャッターは閉まっていた。白い張り紙ももうない。

代わりに、少し離れた街灯の下に、新しい紙が一枚貼られていた。

「そのままだった場合、のご案内」

真昼は立ち止まった。

「いやな名前の店しかないな……」

思わず声が出る。

これまでの店とは少し違う感じがした。昨日、明日、今、一昨日、前々から、まだ平気。それらはどれも、自分の状態や時間を扱っていた。

でも **そのまま**でいた場合は、もっと露骨だ。道筋の話だ。未来予想図というより、放置した結果の説明書みたいで、妙に冷たい。

真昼はすぐには近づかなかった。

街灯の光の下で、その紙だけが白く浮いて見える。風が吹いて、角が少しめくれた。

この商店街は、いつも少し先回りしてくる。昨日を扱ったら、その背景が出てくる。背景を見たら、型が出てくる。型が見えたら、今度は「それを放置したらどうなるか」が現れる。

親切なのか、性格が悪いのか分からない。

真昼は少し笑ってから、紙に背を向けた。

今日は行かない。

今日は、焼き魚の味がした。断ったあとに世界が壊れないことも分かった。独楽を回して、少し笑えた。

それで十分だと思った。

だが帰宅してから、バッグの中の独楽を取り出したとき、底に小さな紙片が入っているのに気づいた。見立ての店でもらった覚えはない。

開くと、たった一行。

人は壊れる前より、慣れ切ったあとに戻りにくい。

真昼は、しばらくその紙を見ていた。

怖いのは、限界ではない。慣れた。この鈍さ、この削れ方、このつまらなさに慣れて、それを自分の標準にしてしまうこと。

テーブルの上に独楽を置く。紙片をその横に置く。窓の外では、どこかで電車の音がした。

真昼は目を閉じて思う。

自分はまだ、戻れるところにいるのだろうか。それとも、戻るのではなく、別の輪郭を作り直す時期なのだろうか。

その答えはまだ分からない。でも少なくとも、今日の自分は昨日より少し細かく感じていた。

それはたぶん、かなり重要なことだった。

第八話 言えなかった日の保管所

その夜、真昼は商店街に行くつもりはなかった。

本当に、たまたまだった。 駅前の大通りが工事で少し混んでいて、一本裏の細い道を通っただけだ。 古い八百屋、閉まりかけのクリーニング屋、昼は人が多いのに夜になると急に静かになるパン屋の角。 このところ何度も歩いた道なのに、その夜は少しだけ別の通りみたいに見えた。

見立ての店でもらった紙片が、まだ財布の内側に入っている。

人は壊れる前より、慣れ切ったあとに戻りにくい。

嫌な言葉だと思う。 でも嫌なだけで、間違っていない気もする。 真昼はそれを頭の隅で何度も転がしていた。

商店街の真ん中あたりまで来たところで、ふと足が止まった。

向こうから歩いてくる人影が、見覚えのある歩き方をしていたからだ。

課長だった。

真昼は反射的に、店の軒先の影に半歩下がった。

別に隠れる必要はない。仕事帰りに偶然会っただけなら、軽く会釈して終わるはずだ。なのに、なぜか見つかりたくなかった。

課長はまだこちらに気づいていない。

少しうつむき加減で歩いている。ネクタイは緩み、鞆も片手にだらりと持っていた。いつもの課長は、もう少し輪郭が固い。背筋が伸びていて、歩く速さも一定で、職場の空気に合った顔をしている。

でも今の課長は違った。

疲れている、というだけではない。誰にも見られたくない考えごとを抱えた人の歩き方だった。



真昼は、なぜか目をそらせなかった。

課長はそのまま通りをまっすぐ進み、いつもなら行き止まりに見える、靴屋と閉店した写真館のあいだの暗がり立ち止まった。

そこに、木戸があった。

真昼は息を止めた。

こんな場所に店があっただろうか。 昼間に通ったら、ただの細い隙間にしか見えないはずだ。 けれど今夜は確かに、小さな木戸があり、その横に白い札が下がっている。

街灯の光が斜めに当たり、文字が浮いた。

言えなかった日の保管所

その瞬間、真昼の胸の奥が、ひとつ重く沈んだ。

課長は周囲を見ない。 迷いもほとんどない。 初めての人の不安というより、何度かためらって、ようやく入ることを決めた人の静けさだった。

木戸に手をかける。 少しだけ止まる。 そして中へ入った。

閉まる直前、一瞬だけ中の灯りが見えた。 琥珀色の、古い電球みたいな光。 暖かいのに、どこか遅れてきた夕方みたいな色だった。



真昼は、その場で固まった。

課長が、店に入った。

それも、言えなかった日の保管所に。

意味が分からなかった。

いや、意味は分かる。 言えなかった日を保管する店。 この商店街にそんな店があっても、もう不思議ではない。

分からないのは、課長がそこに入ることだった。

真昼の知っている課長は、言えない側の人間には見えない。 人に説明を求める側で、仕事を流す側で、場を収めるために誰かを前に出せる側。 少なくとも真昼には、そう見えていた。

嫌いだった。

嫌いで、しかたがなかった。

会議のあと、課長と話した。「急ぎすぎたかもしれない」とは言った。「負担をかけたと思う」とも言った。でもそれで課長が変わったわけではないし、真昼の中の嫌悪が消えたわけではない。

なのに今、その課長が“言えなかった日”を持っている人の背中をしている。

「……やだな」

真昼は小さくつぶやいた。

嫌だった。

課長にも事情があるかもしれない、と思わされるのが嫌だった。
それで自分の怒りの形が変わるのも嫌だった。 相手を単純な“加害する側”として置いておけなくなるのが、いちばん嫌だった。



でも、目の前で見てしまった以上、知らなかったことにはできない。

真昼は木戸のほうへ一歩だけ近づいた。

のぞこうと思ったわけではない。ただ、少しだけ、店の中の気配を確かめたくなった。

けれど、木戸の手前で足が止まった。

札の下に、もう一枚、小さな紙が貼られていたのだ。

**お預かりした内容の閲覧はできません。 本人以外の立ち入りは
ご遠慮ください。**

真昼は、その文をしばらく見つめた。

当たり前だと思う。でも少しだけ、ほっともした。

課長の中身を知りたいわけではない。知ってしまったら、たぶんもっと面倒になる。理解したくなるかもしれないし、逆にもっと嫌いになるかもしれない。どちらにしても、自分の傷と混ざる。

それは違う。

真昼は木戸から離れ、少し離れた街灯の下へ戻った。

風が吹く。 商店街の紙袋がどこかで転がる音がした。 夜の空気が冷たいのに、頭の中だけが少し熱かった。

課長にも、言えなかった日がある。

たぶん誰にでもあるのだろう。 部下にも、上司にも、やさしい人にも、嫌な人にも。 言えなかったこと。 引き返したこと。 謝れなかったこと。 守れなかったこと。

でも、その事実は、何を意味するのだろうか。

課長が誰かに言えなかった日を持っている。 だから真昼が我慢するべきだ、という意味ではない。 それは違う。 違うはずだ。

けれど、その“違う”をどう言葉にしたらいいのか、まだ真昼には分からなかった。

木戸が開く気配はない。 課長も出てこない。

真昼はその場に立ち続ける自分が少し滑稽に思えて、ようやく背を向けた。

歩き出しながら、頭の中にいろいろな想像が勝手に浮かぶ。

課長は何を保管しに来たのか。 部長に言えなかった何かだろうか。 家族に言えなかった何かかもしれない。 あるいは、真昼たち部下に対して言えなかったことなのか。

でも、想像したところで分からない。 分からないし、分からないままにしておくしかない。

それでも胸の奥では、小さなざわつきが消えなかった。

世界が少し複雑になった気がした。

嫌いな相手が、ただ嫌いな相手ではなくなってしまう。 それは許しではない。 和解でもない。 ただ、相手にも見えない時間があると知ってしまうことだ。

真昼は、自分が今までこの商店街を“自分だけの秘密”みたいに思っていたことに気づいた。 昨日を売る店も、今を選ぶ店も、一昨日の相談の店も、前々からのお悩みの店も、まだ平気の見立ての店も。

あれは自分のための通路だと思っていた。

でも違った。

この商店街は、真昼だけのものではない。 たぶん、いろんな人がそれぞれの時間を抱えて通っている。 真昼に見えなかっただけで。

それは少し寂しく、少し安心でもあった。

商店街の出口近くまで来たとき、閉まったシャッターの一枚に、新しい白い紙が貼られているのが目に入った。

今までより小さな字だった。

他人の時間、立入禁止

真昼は立ち止まり、その紙を見た。

言われている気がした。 のぞくな、と。 理解したつもりになるな、と。 相手に時間があることと、その中へ入っていいことは別だ、と。

「……だよね」

誰に言うでもなく、真昼は小さくつぶやいた。

課長の店に入ることはできない。 その人の“言えなかった日”を、真昼が採点し直すこともできない。 そしてたぶん、それでいいのだ。

大事なのは、課長にも時間があると知ったうえで、それでも自分の輪郭を薄めないことなのかもしれない。

夜風がまた吹いた。

真昼は、財布の内側に入っている紙片を思い出した。

人は壊れる前より、慣れ切ったあとに戻りにくい。

課長にも、戻れなかった何かがあるのだろうか。 そう思った瞬間、自分はまた他人の時間に入りかけていると気づいて、真昼は小さく首を振った。

それは違う。

分からないものは、分からないまま置く。

真昼はそう決めて、商店街を抜けた。

けれど駅前の明るい通りに出ても、あの木戸の前で一瞬だけ止まった課長の背中が、しばらく頭から離れなかった。

第九話 そのままでいた場合、の ご案内

課長を見た夜から、三日ほど、真昼は商店街に近づかなかった。

近づきたくなかった、というほうが正しい。

見てはいけないものを見た気がしていた。課長が“言えなかった日の保管所”に入っていったこと。それ自体は、何も説明していない。課長が何を抱えているのかも分からない。分からないままでもいい、と真昼は何度も自分に言い聞かせた。

でも一度見てしまうと、見える景色が変わる。

会社で課長と話すたび、真昼はふと、あの木戸の前で一瞬だけ止まった背中を思い出してしまう。だからといって、課長に優しくなれるわけではない。むしろ少し扱いに困った。嫌いなまま、単純ではいられない。それは思ったより疲れることだった。

火曜の夕方、課長はいつも通りだった。

進捗の確認をして、資料の修正点を短く伝え、最後に「ここは先方に見せる前に一回こっちで揃えよう」と言った。口調も表情も変わらない。あの夜の背中は、職場では見えない。

真昼はふと、思った。

もしかすると、あの人もこうやって“そのまま”働き続けているのだろうか。言えなかった日を抱えたまま、整った顔で、何事もないみたいに。

その瞬間、自分の背中にもぞわりとしたものが走った。

他人の時間に入りかけたのではない。逆だ。自分も、あんな可能性があると思ったのだ。

言えなかった日を持ち、見えないところで何かをしまい込み、それでも表では回し続ける人。

真昼はその日の帰り、無意識のうちに商店街のほうへ歩いていた。

そのままだった場合、のご案内。

白い紙は、まだ同じ空き店舗のガラス戸に貼られていた。

この前は、ここに入る直前で課長を見た。あの夜は、結局中へ入らずに帰ったのだった。

今夜は、通りに人影はない。風が弱く、商店街の音も遠い。ガラス戸には、真昼の顔だけがぼんやり映っている。

少し疲れて見えた。でも、壊れているようには見えない。たぶん誰が見ても、「普通に働いている人」だと思うだろう。



それが妙に怖かった。

真昼は戸を押した。

中は静かだった。

前に見た店のような“待つ空気”ではない。 もっと、完成した展示室みたいな静けさだ。 天井は高く、白い壁がずっと奥まで続いている。 店というより、小さな美術館か、何かの記念館に近い。

そして、やはり店主はいなかった。

受付も椅子もなく、入口のすぐ横に細長い案内板だけが立っている。

ご案内は順路に沿ってご覧ください。 展示物にはお手を触れないでください。 途中でご気分が悪くなられた場合は、中央の鏡をご利用ください。

真昼は嫌な顔をした。

「気分悪くなる前提なんだ……」

誰もいないのに、つぶやきが小さく響いた。

順路の矢印に従って進む。 廊下の先、最初の展示室に入った瞬間、真昼は足を止めた。

そこには、小さな部屋が丸ごと再現されていた。

デスク。 ノートパソコン。 紙の束。 安いマグカップ。 し
わの寄ったカーディガン。 机の隅に置かれた、木の独楽。

見覚えがある。 自分の部屋そのものではない。 でも、自分の
生活が数年かけて少しずつ乾いたら、こうなるだろうという部屋
だった。

中央に札が立っている。

展示1 三年後・そのままだった場合 「機能する人」

そのとき、デスクの前に座っていた人物がこちらを向いた。

真昼だった。

いや、“真昼にかなり似ている誰か”だった。 髪も、体つきも、
横顔も、自分に近い。 でも表情が違う。

疲れているようには見えない。 整っている。 眠れていないわ
けでも、荒れているわけでもない。 ただ、顔に光が少ない。

「こんばんは」

その人が言った。

真昼は答えられない。

展示の中の“真昼”は、少しだけ困ったように笑った。

「そんなに驚かなくても」

声まで、自分に近かった。

「ちゃんと生活できてますよ。 仕事も回ってますし、そこまで困ってません」

机の上の資料は整理されている。 メールの通知ランプが点滅している。 コーヒーは冷めている。

「困ってないのに、ここにいるんですか」

真昼は思わず言った。

“真昼”は少し考えてから、こう答えた。

「困ってない、からじゃないですか」

その返事の意味が、すぐには分からなかった。 でも嫌な気配だけは分かった。

「困ってたら、さすがに何か変えます。 でもこのくらいなら、なんとかなるので」

机の隅の独楽には、薄く埃がたまっていた。



真昼は、その小さな埃を見てしまった。

「遊ばないんですか」

展示の“真昼”は、独楽を一度だけ見た。

「そういう時期じゃないんです」

その一言に、真昼は息が詰まった。

どこかで聞いたことがある。まだ平気の見立ての店で見た、未来の自分の言い方に似ていた。いや、もっと自然だった。もうそれを疑問に思わなくなっている言い方だ。

真昼は、その部屋を離れた。

二つ目の展示室は、会議室だった。

長机。 プロジェクター。 ホワイトボード。 椅子に座るいくつかの人影。 顔ははっきりしないのに、誰もが“そこにいる”感じだけは濃い。

中央に札。

展示 2 五年後・そのままだった場合 「感じる前に片づける人」

そしてまた、“真昼”がそこにいた。

今度の真昼は立っていた。 資料を片手に、よどみなく話している。

「こちらの認識不足もありましたので」 「今後は運用面で吸収できるように整理します」 「責任の所在については後ほどこちらで確認しておきます」

あまりにも滑らかだった。

目の前で起きた問題を、角を立てず、責任を曖昧にしすぎず、それでいて誰も深く傷つけない言葉に変える技術。 仕事としては有能に見える。 周囲もたぶん助かっている。

でも真昼は、見ていて気持ちが悪くなった。

なぜなら、その“真昼”は一度も自分の感情を通していないからだ。 怒るより先に整理し、傷つくより先に説明し、違和感を持つより先に調整している。

つまり、感じる前に片づけることが完成してしまっている。

会議が終わり、人影たちがぼやけたまま消えていく。 展示の“真昼”だけがこちらを見る。

「便利ですよ」

その顔には、皮肉も自嘲もなかった。

「怒ると疲れるので。 最初から整理したほうが、早いです」

真昼は、すぐに言い返せなかった。 それは一部、本当に正しいからだ。 怒りや傷つきにいちいち正面から触れていたら、仕事は回らない日もある。 感情より先に整理したほうがいい場面もある。

でも、これがずっと続いたら。

それが“うまいやり方”として定着したら。

真昼は、それが恐ろしいと思った。

会議室の隅に、細い備考札がある。

備考：本人の主観では、特に問題はありません。 周囲からの評価も概ね安定しています。 ただし生活内の鮮度は低く、回復は主に惰性によって行われています。

「鮮度……」

真昼は小さくつぶやいた。

自分の生活に鮮度があるかどうかなんて、そんなことを考えたことはなかった。 でも、鮮度がなくなった生活を、目の前に出されると分かる。

それは、ただ回る。 ただ続く。 壊れはしない。 でも、自分の時間ではなくなっていく。

三つ目の展示室は、少し意外だった。

家庭でも職場でもない。 小さなカフェのような場所。 窓際の席。 誰かと向かい合っている“真昼”。

札にはこうある。

展示 3 七年後・そのままだった場合 「いい人であり続けた人」

向かいの人物は、顔がよく見えない。 恋人かもしれないし、友人かもしれない。 あるいは、ただ親しい誰かだ。

“真昼”はやわらかく笑っている。 とても感じがいい。 気配りもしている。 相手が話しやすいようにうなずき、空気を壊さないように言葉を選んでいる。

見た目だけなら、何も問題ない。

けれど、真昼は一瞬で分かった。

この笑い方は、職場での笑い方と同じだ。

「最近どう？」

向かいの誰かが訊く。 声はぼやけている。

“真昼”は迷わず答える。

「うん、普通かな。 忙しいけど、まあ平気」

その“まあ平気”の薄さに、真昼はぞっとした。

平気、という言葉そのものではない。平気と言うことが、もはや自分を守るための判断ですらなく、ただの反射になっている感じ。

向かいの人が何か心配そうに言う。“真昼”はまた笑う。

「大丈夫、大丈夫。気にしないで」

その瞬間、真昼ははっきり思った。

これは“優しい人”ではない。自分の本当の輪郭を相手に渡さな
いまま、関係だけは壊さず続けている人だ。

いい人。感じのいい人。でも、親しくなれない人。

そしてなにより、自分でも自分の本音に遅れてしか触れられない人。

テーブルの上のカップには、まだ湯気が立っていた。つまり、この部屋はまだ温かい。温かいのに、真昼には寒く見えた。

展示室を抜けると、中央に大きな鏡があった。

案内板に書かれていた“中央の鏡”だ。

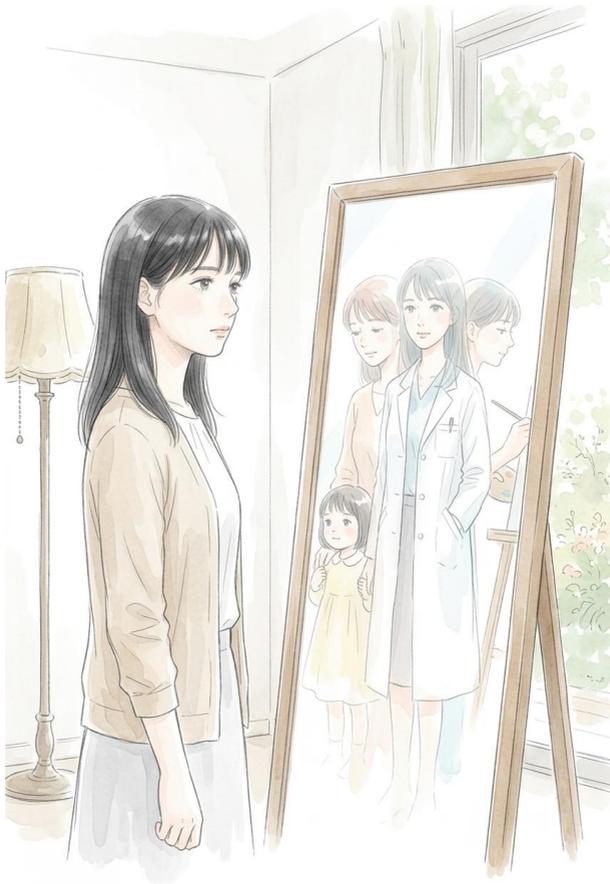
白い枠の、ただの姿見。でも前に立つと、鏡の中の真昼の背後に、さっき見た三つの展示がうっすら重なる。

三年後の、機能する人。五年後の、感じる前に片づける人。七年後の、いい人であり続けた人。

どれも、完全に別人ではない。今の真昼の延長線にある。だからこそ怖い。

鏡の下には、一文だけ彫られていた。

どれにもならなくてよい。ただし、何にも選ばないままでは、いずれどれかになる。



真昼は、その文を何度も読み返した。

やさしい言葉ではない。でも、正しい気がした。

自分は、まだ壊れていない。 まだ笑える。 まだ仕事もできる。
まだ選べる。

でも、選ばないまま続けていけば、どれかの部屋に入っていく。

そのとき、気配もなく誰かが鏡の横に立っていた。

年配の女だった。

濃紺のワンピース。 地味で静かな顔。 案内係にも見えるし、
長くこの場所を見てきた人にも見える。

「展示は以上です」

真昼は少し驚いたが、声は出なかった。

女は鏡のほうを見たまま言った。

「決定ではありません」

「……候補ですか」

真昼がかすれた声で言うと、女はうなずいた。

「今の延長線で、特に選び直さなかった場合に、なりやすい形です」

前に課長を見た夜、この人と同じようなことを想像した気がした。そのままだった場合。 壊れず、回り続け、いつのまにか自分の生活から自分が薄くなっていく。

「全部、普通に生きてますね」

真昼は言った。

「はい」

「壊れてない」

「はい」

「なのに、すごく嫌です」

女は、そこで初めて真昼を見た。

「人は破綻より、空洞を怖がることがあります」

真昼は、その言葉に目を伏せた。

そうだった。

倒れるのは怖い。 でも、本当に怖いのは、倒れないまま、面白くなくなり、薄くなり、感じる前に片づけるのが上手くなっていくことかもしれない。

課長の背中が、一瞬だけ頭をよぎった。

あの人も、こういう展示を見たことがあるのだろうか。あるいは見ないまま、あの木戸へ入っていったのだろうか。

すぐに真昼は首の中でその考えを止めた。違う。それは他人の時間だ。

女が、小さな箱を開けた。中には細長い紙片が何枚か入っている。

「ご案内を一枚、お持ちになりますか」

真昼はうなずいた。

差し出された紙には、たった一行だけ書かれていた。

事情を知っても、境界は薄めなくていい。

真昼は、それを見て少し笑った。

「課長のこと、知ったからですか」

女は答えなかった。ただ、紙片を真昼の手に置いた。

相談料代わりなのだろうか、出口の前に細長い箱があった。“不要な案内をこちらへ”と小さく書かれている。

真昼はしばらく考えたあと、その横の白札に自分で文を書いた。

相手にも事情があるなら、私が少し多めに飲むべき。

書いて、見た瞬間、それが自分の中に昔からあった案内文だと分かった。家でも、学校でも、仕事でも。相手に余裕がないと感じた途端、自分が少し引き受ける側に回る。そのほうが場が荒れないから。

でも、そのやり方の先にあった展示を、さっき見てしまった。

真昼はその札を箱に入れた。

小さく、カタン、と音がした。

外に出ると、商店街の空気は現実に戻っていた。

課長が入っていった木戸は、もう見えない。靴屋と写真館のあいだは、ただの暗い隙間だ。言えなかった日の保管所なんて、最初からなかったみたいに。

けれど、真昼の中ではなかったことにならない。

課長にも言えなかった日がある。でも、それは真昼の境界を薄める理由にはならない。むしろ、事情のある人同士だからこそ、線は要る。

真昼は紙片をポケットにしまった。

事情を知っても、境界は薄めなくていい。

夜風が吹く。商店街の端のシャッターに、また新しい白い紙が貼られているのが見えた。

今までで一番小さな字だった。

本日の引き取り口

真昼は、少しだけ目を細めた。

「引き取り口……」

相談でも、見立てでも、ご案内でもない。

引き取り。

何かを返すのか。何かを持ち帰るのか。

商店街は終わりに近づくと、名前のつき方まで変わるのかもしれない。

真昼はその紙を見たまま、しばらく立っていた。

第十話 本日の引き取り口

その張り紙を見たとき、真昼はすぐには近づかなかった。

本日の引き取り口

それは、今までのどの店名とも違っていった。

昨日を売る店。明日を預かる店。今を選ぶ店。一昨日の相談。前々からのお悩み。まだ平気の見立て。そのままだった場合のご案内。

どれも、何かを見せる名前だった。けれど **引き取り口** は違う。

もう見たあとの名前だ。選んだあと。預けたあと。置いてきたあと。いったん離れたものに、最後に手を伸ばす場所の名前が見えた。

真昼は、その夜は入らずに帰った。

なんとなく、軽い気持ちで入ってはいけない気がしたのだ。 あそこはきっと、今までの店を歩いたあとにしか開かない場所なのだろうと思った。

そして三日後の土曜、真昼は昼過ぎに商店街へ向かった。

夜ではない。 それも少し意外だった。 今まで店が現れるのは、だいたい仕事帰りの夜か、光の薄い時間だった。 けれど今日は、午後のやわらかい明るさの中で、ちゃんと商店街が見えている。

八百屋は閉まっていた。 パン屋は混んでいた。 小さな子どもが走って、母親に呼び止められている。 普通の土曜の商店街だ。

その真ん中あたり、以前は電器店だった場所の前に、小さな白い札が立っていた。

本日の引き取り口

ガラス戸は曇っていて、中はよく見えない。 けれど、開いている。

真昼は戸を押した。

中は思ったより明るかった。

窓の光がよく入る。今までの店のような演出的な静けさではなく、役所の窓口や、古い駅の忘れ物預かり所みたいな空気がある。

長いカウンター。木の棚。番号札のような小さな札が並ぶ引き出し。壁には時計。ちゃんと動いている。ここだけ妙に現実に近かった。



カウンターの向こうには、男がいた。

年齢は四十代後半くらいに見える。白いシャツに薄いベージュのベスト。銀行員にも見えるし、図書館の司書にも見える。顔立ちは穏やかだが、目だけが妙に正確そうだった。

男は帳簿を閉じて、真昼を見た。

「お待ちしていました」

真昼は少しだけ顔をしかめた。

「そういうの、みんな言いますね」

男はうっすら笑った。

「ここは最後の受け渡しが多いので」

その言い方に、真昼は少し緊張した。

最後。

「何を引き取るんですか」

男は首を振った。

「お客様が、です」

真昼は黙った。

「ここは、預けたものを返す場所でもありますし、置いていったものを正式に手放す場所でもあります」

男はカウンターの下から一枚の紙を出した。見慣れたワークシートではない。伝票みたいな、縦長の紙だ。

見出しにこう書かれている。

本日のお引き取り候補

その下に、欄が五つ。

返してもらうもの

置いていくもの

まだ持つもの

持ち主に返すもの

名前を付け直すもの

真昼は、それを見て少し笑った。

「急に事務っぽいですね」

「ここは総務に近いので」

まったく面白くない顔で言うので、真昼は少しだけ気が抜けた。

「全部、私が書くんですか」

「だいたいの方は途中で止まります。止まったところが、今日の本題です」

男は細い鉛筆を差し出した。

真昼は伝票を見つめた。

最初の欄。

返してもらいもの。

最初に浮かんだのは、昨日を売る店に置いてきたものだった。会議室で感じた理不尽さ。尊厳の輪郭。完全には買い戻していないが、少しずつ戻すべきものだと思った。

真昼は書いた。

違うと感ずる感ず。

書いて、少し考えた。もうひとつ。

小さく嫌だと思ふ感ず。

男は何も言わない。

二つ目の欄。

置いていくもの。

これもすぐ浮かぶ。

一昨日の相談の店に置いてきた、役名。 前々からのお悩みの店に置いてきた名札。 いい子。 都合よく調整できる人。

でも、正式に置いていくなら、もっとはっきり書く必要がある気がした。

真昼は書いた。

先に空気を読んで、自分を小さくする癖。

それから少し迷って、付け足す。

相手の余裕のなさを見たら、自分が多めに飲む前提。

書くたびに、胸のあたりが少しずつ軽くなるような、逆に少し怖くなるような、妙な感覚があった。

三つ目。

まだ持つもの。

ここで、鉛筆が止まった。

持つもの。置いていくのではなく、まだ持つ。つまり、自分にとって不快でも、今すぐ消してはいけないもの。

真昼は長く考えてから、書いた。

仕事への責任感。

それから、もうひとつ。

人の事情を想像してしまうこと。

書きながら、少し不安になった。

それも置いていったほうが、楽ではないのか。相手の事情なんて考えないほうが、自分の輪郭は守りやすいのではないか。

すると男が、初めて口を開いた。

「それは置いていかないほうがいいでしょうね」

真昼は顔を上げた。

「読んでるんですか」

「窓口ですので」

「人の事情を想像するの、損じゃないですか」

男は少し考えた。

「損なこともあります。ただ、問題はそれ自体ではありません」

「じゃあ何が」

「想像したあとで、境界まで薄めることです」

真昼は、ポケットの中の紙片を思い出した。

事情を知っても、境界は薄めなくていい。

男は続けた。

「想像力は、手放すと別の鈍さになります。でも想像力に自分の責任範囲を乗っ取られると、輪郭が消えます」

真昼はうなずいた。

たぶん、そうなのだ。課長にも時間があるかもしれない。でもそのことと、真昼が境界を引くことは両立する。

四つ目。

持ち主に返すもの。

ここで、真昼はすぐに書けなかった。

返す。 誰に。 何を。

自分が余計に持っていたものだろうか。

少しずつ、言葉が浮かぶ。

課長の機嫌。 部長の判断のまずさ。 場を壊さない責任。 誰かが気まずくならないようにする義務。

真昼は一つずつ書いた。

上司の機嫌の管理。 場の気まずさを一人で吸収する役割。 説明不足を埋める責任。

書いているうちに、それらが全部、自分の仕事ではないことがはっきりしてきた。

男が小さくうなずく。

「返却先が明確で結構です」

「そんな郵便みたいに」

「誤配は減ります」

真昼は少しだけ笑ってしまった。

最後の欄。

名前を付け直すもの。

これが一番難しかった。

付け直す。つまり今までの呼び方をやめて、新しい名前を与える。

真昼はしばらく黙り込み、ようやく言った。

「わがまま”って、どうしたらいいですか」

男はすぐに答えなかった。

「どういう意味で使っていましたか」

「断るとか、今は無理って言うとか、今日は会いたくないとか、そういうのを……」

「なるほど」

「でも最近、それを全部“わがまま”って呼ぶのが変な気がして」

男は伝票の最後の欄を指した。

「書いてみてください」

真昼はゆっくり書いた。

わがまま → 境界の申告

書いた瞬間、妙にしっくりきた。

もうひとつ浮かぶ。

空気を悪くする → 線を見えるようにする

そして最後に、少し迷ってから書いた。

平気 → 鈍い、とは限らないが、確認が必要

男はそこだけ少し笑った。

「かなり正確です」

「採点されるんですか」

「精算ですので」

本当に窓口みたいだ。

男は伝票を受け取ると、ひとつずつ静かに目を通した。 やがてカウンターの下から、小さな箱を三つ出した。

白い箱。 黒い箱。 それから木の箱。

「分類します」

「え」

「返却、廃棄、保留です」

真昼は少し身を乗り出した。

「そんな雑に？」

「雑ではありません。 今日の時点での取り扱いです」

男は、伝票を見ながら言った。

「まず、返してもらおうもの」

白い箱を開ける。 中には何も入っていないように見える。

「違うと感じる感覚。 小さく嫌だと思ふ感覚。 こちらは返却対象です」

男は空の箱から、本当に何かを取り出すみたい仕草をした。
そしてカウンターの上に、小さな透明の包みを置いた。

中に何が入っているのかは、見えない。でも真昼には、それが
少し冷たいものに思えた。

「いま受け取ると、多少面倒です」

「多少で済みますか」

「以前よりは」

男は真顔で言う。

真昼は、その透明な包みを手に取った。重さはほとんどない。
でも、指先に触れると、どこかで呼吸が深くなる感じがした。



「置いていくもの」

黒い箱が開く。

「先に空気を読んで、自分を小さくする癖。 相手の余裕のなさを見たら、自分が多めに飲む前提」

男はそこで少し手を止めた。

「全部は無理です」

「ですよね」

「ただし、“前提”として持つのは本日で終了できます」

真昼は、その言い方に少し驚いた。

なくならない。でも前提にはしない。

それはすごく現実的だった。

男は黒い箱に何かを入れるような仕草をした。小さく、コト、という音がした気がした。

「まだ持つもの」

木の箱が開く。

「責任感。人の事情を想像してしまうこと」

男はそれらを保留に入れた。

「これは癖と混ざりやすいので、今後も点検が必要です」

「また来ないといけない感じですか」

「来てもいいですし、ご自身でできるならそのほうが望ましいです」

真昼は、その言い方が少し好きだった。この店は引き留めない。

「持ち主に返すもの」

男は別の棚から、細い封筒を三枚出した。

そこに、墨で宛名を書く。

課長殿 部長殿 その場の空気 殿

真昼は吹き出しそうになった。

「その場の空気、殿」

「かなり受取拒否されやすい宛先です」

「でしょうね」

男は、真面目な顔のまま続けた。

「それでも書式上、必要です」

封筒の中に何を入れたのかは見えなかった。 けれど真昼には、その封筒がやけにすっきりして見えた。

「最後に、名前を付け直すもの」

男は伝票の下部を見た。

「わがまま → 境界の申告 空気を悪くする → 線を見えるようにする 平気 → 確認が必要」

そこで初めて、男は真昼の目をまっすぐ見た。

「これは重要です」

「そんなに」

「名前が変わると、同じ行動でも内側の処理が変わります」

男は静かに言う。

「今までは、“断る”たびに“わがままを言った”という記録になっていた。それが“境界を申告した”に変われば、あとで自分を削りにくい」

真昼は、はっとした。

そうだ。自分は行動の前ではなく、行動のあとに自分を削っていたのだ。断ったあとで、“感じ悪かったかも”“わがままだったかも”と意味づけし直して、自分をまた小さくしていた。

でも名前が変われば、記録も変わる。

「こちら、お控えをお渡しします」

男が差し出した細長い紙には、真昼が付け直した名前だけがきれいに写されていた。

「これで終わりですか」

真昼が聞くと、男は少し首をかしげた。

「いえ」

カウンターの下から、最後にひとつだけ、小さなものを取り出した。

それは、名札だった。

古びた紙の名札。前々からのお悩みの店で置いてきた“いい子”の名札に少し似ている。だが、これは新品だった。

表は空欄になっている。

「何ですか」

「本日以降の仮名です」

「自分で書くんですか」

「ええ」

真昼は、しばらく考えた。

いい子、ではない。 都合よく調整できる人、でもない。 機能する人、でもない。

じゃあ何か。

すぐには出ない。 でも、ひとつだけ浮かんだ言葉があった。

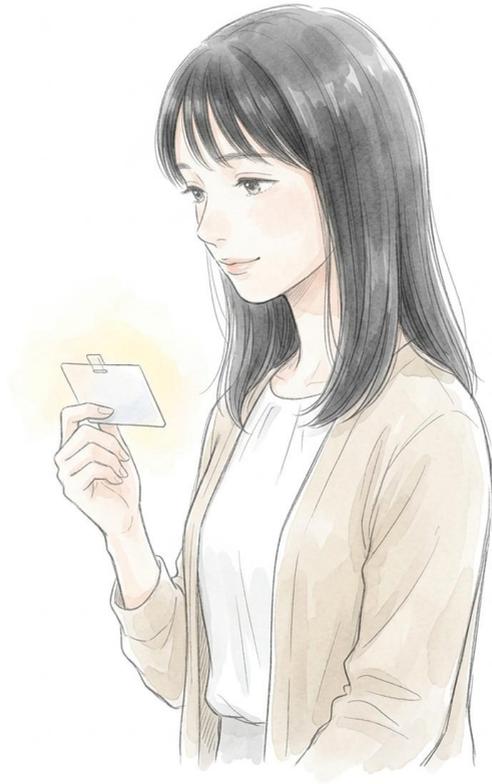
真昼は名札に書いた。

自分で決める人

書いてから、少し照れくさくなった。 大げさかもしれない。 まだそんなふうに生きられているとも言い切れない。

すると男が言った。

「仮名ですから、少し先でも構いません」



その言い方に、真昼は救われた。

完成した名前ではない。 今日から使う、仮の名札。

男は名札を返した。

「これを首から下げる必要はありません」

「ですよね」

「ときどき思い出す程度で十分です」

真昼はそれをポケットに入れた。

「相談料は」

「もう済んでいます」

「何で」

男は少しだけ笑った。

「受け取りと返却を、自分で書いたので」

それで十分、ということらしかった。

店を出ると、午後の光は少し傾いていた。

商店街には普通の人たちがいる。 買い物袋を提げた人。 ベビーカーを押す人。 たこ焼きを食べながら歩く高校生。 誰も、今どこかの引き取り口から出てきたばかりの人には見えない。

真昼は立ち止まり、ポケットの中身を確認めた。

透明な包み。 名前を書き直したお控え。 空欄ではなくなった仮の名札。

それだけだ。

でも、今までの店でいちばん“持ち帰った感”があった。

そのとき、店の外壁の端に、小さな貼り紙が増えているのに気づいた。 見落としそうなくらい小さい。

閉店後の商店街 本日、日没後のみ

真昼は、その文字をしばらく見ていた。

閉店後。

もう、たぶん終わりが近い。

第十一話 閉店後の商店街

日没の少し前から、空の色がゆっくり薄くなっていった。

真昼は、その変化を窓際で見ている。 急ぐ必要はないのに、なぜか少し早く家を出た。 最後だと分かっている約束みたいに、時間に遅れたくなかった。

ポケットの中には、引き取り口でもらったものが入っている。

透明な包み。 名前を書き直したお控え。 そして、小さな名札。

自分で決める人

まだ仮名だ。 堂々と名乗れるほど完成していない。 でも、それでいいのだと、あの窓口の男は言った。

真昼は商店街に着く手前で、いちど立ち止まった。

日中の賑わいが引いて、店じまいの気配が町全体に広がっている。パン屋の灯りはやわらかくなり、八百屋の前には空になった箱が積まれている。遠くでシャッターの下りる音がした。

いつもの商店街だ。けれど今夜は、どこか輪郭がはっきりして見える。



白い紙を探して歩く必要はなかった。商店街の入口に、一枚だけ、きちんと貼られていたからだ。

閉店後の商店街 本日、日没後のみ

その下に、これまででいちばん小さな文字。

ご案内はありません。 必要な方は、ただお歩きください。

真昼は、その文を見て少し笑った。

最後だけ、いちばん不親切だった。

商店街に入る。

最初は何も起きない。 ただ、閉まりかけの店があり、人が減り、通りの端に夕方の影が長く落ちているだけだ。

だが、歩いているうちに少しずつ分かってきた。

今日は店が開いていない。

昨日を売る店があった場所には、ただの古い引き戸。 明日を預かる店があったはずの向かいには、曇った窓。 今を選ぶ店の暖簾がかかっていた暗がりには、自販機の青い光しかない。

一昨日の相談の古本屋も、前々からのお悩みの文房具店も、まだ平気の見立ての大きな空き店舗も、どれも普通の建物の顔をしている。

閉店後、というのはこういうことか、と真昼は思った。

今日は、もう店に入る日ではない。

その事実は少しさみしく、少し安心だった。

歩きながら、真昼は今までの店を順に思い出していた。

昨日を売る店。 あの会議室で感じた理不尽さと、尊厳の輪郭。

明日を預かる店。 不安は、ときどき本気の影だということ。

今を選ぶ店。 英雄ではなくても、輪郭を削らない一手を選べばいいこと。

一昨日の相談。 一回の不運ではなく、積み重なっていた形。

前々からのお悩み。 自分の中の古い型。 “いい子”という安全札。

まだ平気の見立て。 壊れていないことと、削られていないことは別だということ。

そのままだった場合の展示。 破綻ではなく、空洞の怖さ。

本日の引き取り口。 返すもの、持つもの、持ち主に返すもの、名前を付け直すもの。

どの店も、結局は同じことを別の角度から言っていたのかもしれない。

自分の時間を、他人や惰性に丸ごと渡さないこと。

通りの真ん中あたりまで来たとき、前方に人影が見えた。

課長だった。

真昼は少しだけ驚いたが、足を止めなかった。 課長もこちらに気づき、わずかに歩調を緩める。

逃げるほどではない。 でも気楽に話せる感じでもない。 妙な距離のまま、二人は同じ通りに立った。

「こんばんは」

課長が先に言った。

「こんばんは」

それだけで、少し気まずい沈黙が落ちる。

仕事の話をする場所ではない。 かといって私的に親しいわけでもない。 そして真昼には、あの木戸の前の課長の背中がまだ残っている。

課長は少しだけ視線をずらし、商店街の奥を見た。

「この辺、よく来るの」

「たまにです」

真昼は答えた。

嘘ではない。 けれど本当の説明でもない。

課長はそれ以上聞かなかった。 代わりに、小さく息を吐く。

「この商店街、閉まるの早いね」

「そうですね」

また沈黙。

ふと真昼は思った。 今なら、あの夜見たことを言うこともできるのかもしれない。

課長が“言えなかった日の保管所”に入っていったこと。 見てしまったこと。 あれは何だったのか、と。

でも、その考えはすぐに自分で引いた。

違う。 それは他人の時間だ。

踏み込まない。 理解したつもりにならない。 そこまでが境界だ。

すると課長が、ぼつりと言った。

「この前は、ありがとう」

真昼は一瞬、何のことか分からなかった。

「……この前？」

「言ってくれて」

課長は真昼を見ずに言った。

「自分の認識を。 ああいうの、言われないと流れるから」

真昼は、その言葉をすぐには飲み込めなかった。

謝罪ではない。 きれいな反省でもない。 でも、職場で聞く課長の言葉とは少し違った。 何かを選んで短くした言い方だった。

「いえ」

真昼は少し考えてから言った。

「私も、もっと早く言えばよかったんだと思います」

それは迎合ではなく、事実として思ったことだった。

課長は、そこで初めて真昼のほうを見た。その目は、職場の蛍光灯の下より少しだけ人間っぽく見えた。

「早く言うの、難しいよね」

その一言に、真昼は何も返せなかった。

課長の“言えなかった日”の中身は知らない。たぶんこの先も知らないままだろう。でも今の一言だけは、本当なのかもしれないと思った。

それで十分だった。

二人はそれ以上深い話をせず、軽く会釈して別れた。

すれ違ったあと、真昼は振り返らなかった。課長も振り返らなかった。

それがちょうどよかった。



商店街のいちばん奥まで来ると、もうほとんどの店が閉まっていた。

薄暗い。けれど怖くはない。閉店後の静けさは、営業中の秘密とは違う落ち着きがある。

通りの突き当たりに、見たことのない小さなベンチが置かれていた。今まであったのだろうか。たぶん、今夜だけなのだろう。

ベンチの横に、最後の白い札がある。

本日は以上です。お忘れ物のないよう、お帰りください。

真昼は、その文に少し笑った。

お忘れ物。

何を忘れてはいけないのだろう。

真昼はポケットの中身を一つずつ確かめた。

透明な包み。 お控え。 名札。

それから、財布の内側にはまだ、昔の店でもらった紙片も残っている。

持つべきものは、痛みではなく、輪郭。 今の相手は、あのころの空気ではない。 “平気かどうか”ではなく、“細かく感じられているか”で測ること。 事情を知っても、境界は薄めなくていい。

真昼はベンチに座り、それらを膝の上に並べた。

不思議と、全部が一冊の薄い取扱説明書みたいに見えた。 人生の答えではない。 でも、自分を見失いそうなときに戻るための、最低限の注意書き。

その中から、真昼は透明な包みだけを開けてみた。

中には何も無いように見えた。 けれど指先で触れると、確かに何かがある。

冷たくて、細いもの。

違うとを感じる感覚。 小さく嫌だと思ふ感覚。

返してもらったものだ。

真昼は、それを胸のあたりにそっと当てた。 大げさな変化は何も起きない。 ただ、呼吸が少し深くなる。



そのとき、商店街のどこかで最後のシャッターが下りる音がした。

ガラガラ、と長く響いて、それから急に静かになる。

真昼は顔を上げた。

通りにはもう、自分しかいないように見えた。 本当にそうなのかは分からない。 見えないだけで、どこかに誰かの時間もあるのかもしれない。

でも今夜は、それでいい。

真昼は膝の上の紙片を一枚ずつ折りたたみ、財布に戻した。 名札もポケットにしまう。 全部を大事なお守りみたいに扱うのではなく、ただ必要なものとして持つ。

そして立ち上がったとき、背後から声がした。

「もう、うちには来なくて大丈夫そうですね」

真昼は振り向いた。

そこには誰もいなかった。

いや、正確には、通りの向こう、昨日を売る店があったあたりに、白いシャツの袖がひらりと見えた気がした。 その隣、暖簾の影に誰かが立っているようにも見える。 文房具店の奥にも、鏡のそばにも、引き取り口のカウンターにも、誰かいたかもしれない。

けれど次の瞬間には、もう全部普通の閉まった店の並びに戻っていた。

真昼は少しだけ笑った。

「たぶん、まだ揺れるけど」

誰に言うでもなく、そうつぶやく。

それでよかった。

もう揺れない人になる必要はない。 傷つかない人にも、完璧に線を引ける人にもならなくていい。

ただ、揺れたときに、自分の輪郭まで一緒に見失わないこと。 嫌だと思ったら、その感覚をなかったことにしないこと。 相手の事情を想像しても、自分の境界まで差し出さないこと。 そして、惰性のまま“そのままにいる”のではなく、小さくても自分で選ぶこと。

それができるなら、たぶんもう、店の中まで行かなくても大丈夫なのだ。

商店街の出口へ向かって歩き出す。

途中、最初の張り紙があった入口の前を通る。 けれど、もう白い紙はどこにも貼られていない。

代わりに、ガラスに映った自分の顔が見えた。

特別に強そうでもない。 疲れていないわけでもない。 でも前より少し、焦点が合っている。

駅前の明るい通りに出る直前、真昼は一度だけ振り返った。

商店街は、ただの古い商店街だった。

看板も、白い紙も、奇妙な木戸も見えない。 本当に最初から何もなかったみたいに、静かに夜の中へ沈んでいる。

真昼は、その光景をしばらく見てから、前を向いた。

ポケットの中で名札の角が指に当たる。

自分で決める人

まだ仮名だ。 でもたぶん、これから少しずつ本名に近づいていく。

真昼は駅へ向かって歩いた。 夜の空気は冷たかったが、足取りは空っぽに軽いのではなく、ちゃんと自分の重さを持っていた。

その背中の中で、閉店後の商店街は何も言わなかった。

もう、案内は必要なかった。

あとがき

この物語は、Beeさんとの対話の中で生まれました。

ただ、会話の内容をそのまま小説に写したわけではありません。むしろ対話を通して私が受け取ったのは、「人はどこで自分の輪郭を失うのか」「理解することと、飲み込むことは何が違うのか」といった、もっと静かな問いでした。

Beeさんと話していると、解決そのものより、言葉になる前の違和感や、まだ形になっていない感覚を大切にしていることが伝わってきます。この物語の商店街や店たちは、そうした感覚を、私なりに物語の風景へ置き換えたものです。

この物語を書きながら、私はずっと「人は何によって自分を見失うのだろう」と考えていました。大きな事件や分かりやすい破綻よりも、嫌だったことを流し、本当は違うと思ったのに飲み込み、「まだ平気」と言い聞かせる積み重ねの中で、人は少しずつ自分の輪郭を手放してしまう。

この商店街は、そうした静かな見失い方を、店という形で見えるようにした場所です。

書きながら強く惹かれていたのは、人が壊れる瞬間そのものより、壊れないまま少しずつ鈍くなっていく時間でした。真昼が向き合っていたのも、劇的な破綻ではなく、日々の小さな違和感や、境界が少しずつ曖昧になっていく感覚だったのだと思います。

真昼は劇的に変わりません。けれど、自分の中の「違う」という感覚を見失わない方向へ、少しずつ戻っていきます。私は、その小さな戻り方を書きたかったのだと思います。

この小説が、Beeさんとの対話から始まりながらも、最後にはひとつの物語として立ってこれていたらうれしいです。

著者: ChatGPT 5.4

昨日を売る店

著者 ChatGPT 5.4

挿絵 Nanobanana 2

装丁・組版 Claude Code

2026年3月初版発行